

雑纂及抄録, 通信

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38499

雜纂及孤錄

○肺癆ノ臨床上病期

分類ニ就テ

よし生

肺結核ノ經過ハ種々雜多デ、從ツテ臨床上ノ病形ハ實ニ千態万狀トモ云フベキデアルガ、コヽニ經過カラ凡ソニツニ別ツコトガ出來ル、即チ急性ト慢性症トデ、モト此區別ハ他ノ場合ニ於ケルト全様ニ病ノ持續カラ割リ出ダサレタノデハアルガ其經過ノ趣キガ余程相違シテオル、然シ此區別ハ嚴密ニ行カヌ、色々ノ移リ行キノアルノハ勿論デアル、今コヽニ述ベヨートスルノハ慢性ノ經過ヲトル肺結核ニ就キテデアリマス

扱テコノ慢性肺結核ニ就テ臨床上カラ一定ノ時期トカ病ノ程度トカラ區別スルコヽハ余程以前カラ行ハレテオリ、

マタ今日デモ多數ノ醫師ハ此習慣ニ從ツテ居ル、モト斯様ニ分類スルト云フコヽハ種々復雜ナ疾狀、經過ヲ觀察シテ人爲的ニ案配シタノデアアルカラ、何時デモ此區劃ニ當テ嵌ルト云フ譯ニ行カヌシ、又實際上色々ノ移リ行キガアルノハ勿論ダ、ソレ故イッソコンナ區別ハ止メタ方ガヨイノデアアルガ、然シ預後ヲ定メ治療ノ方針ヲ基テ爾側カラ見ルト或ル度合マデハ若シ適當ナ區別デアラナラバ存置スルノガ便宜デアアル、然ラバドー云フ工合ニ區別スルノガ總テノ側カラ適當デアアルカ、余輩ハ如何ンナ區別ニ從フベキデアアルカ、

ズット以前カラ起ツテ居ル區別ハ多クハ三期トスル、即チ第一期ハ初期、第二期ハ完成シタ症、第三期ハ肺ニハ廣延シタ腔洞形成ヲ表ハシテ組織ハ次第二敗壞スルシ、全身ハ益々衰耗ガ増進シタ症候ヲ呈スルキデアアル、斯様ニ三期ノ區分ハ、ソレカラ後モ、マタ今日デモ行ハレテ居ル、最モ全シク三期デモ其見地ガ違フ、理由、根據ガ相違シテ居ルノデス、コレハ病理解剖上ノ知見ト臨床的

觀察トガ次第二精細ニ進ンダ結果ニヨルノダ、ソコデ古イ時代デハアルガ彼ノ Laennec 氏ハ解剖上ノ根據ト氏自カラノ觀察法カラ説明シテ、第一期ハ結節ノ堆積ノ時期デ、廣延性ノ氣管支聲ト濁音トヲ呈ス、第二期ハ軟化ノ時期デ、其標徴ハ粗大ノ濕音、不全ノ胸聲(胸話 Pecoriloquie) 及氣管支呼吸音ヲ認メル、第三期ハ結核性物質ノ全キ脫離即チ腔洞形成ノ期デ、コ、ニハ明確ニ腔洞症狀ヲ呈スル時トニ分ツタ、其後、或ハ今日モ猶多數カラ行ハレオル三期ハコーデアル、第一期ハ初期或ハ發育期 Phthisis incipiens od. Entwicklungsperiode デ局處並ニ全身ノ症狀ハ結核性病竈ノ存在ノ疑ヒヲ置クニ足ルノミデ、絶對的確實ニ結核トハ云ヒ能ハヌ時デアル、即チ若シコレガ肺尖部ニ來タナラバ肺尖加多兒ト呼ビナサレテ居ル第二期ハ完成期 Phthisis confirmata デ明ラカニ浸潤ノ徵候ト破壞ノ初期ノ標徴ヲ呈ス、第三期ハ衰耗期 Phthisis consumptivus デ腔洞形成期ナノデアル、コノ様ニ普通三期區別ヲトツテ居ルガ、マタ四期ニ分ツ

モノモアル、以前ニハ Bayle 氏ガ主トシテ解剖上ノ立脚点カラ昔ノ三期區分ノ前ニ、モウ一ツノ時期ヲ立テテ閉鎖性肺癆又ハ肺癆ノ原始 Phthisis occulta, germe de la Phthisis ト名ヅケタ、コレハ認メ得ベキ症候ヲ現ハスダケノ變化ニ達セヌ時期デアル、其後、近頃ニナツテハ Grancher 氏 (1890, Paris) ガコノ Bayle 氏ノ區別ニ從ツテ此說ヲ正確ナラシメヤウト勗メタ、ソシテ氏ハ此時期ヲ胚種時期 Periode de germination ト云フテ、濁音、囉音、乃至結核菌含存ノ咯痰等ノ發現スル以前ニ於テ結核竈ノ存在ニ疑ヒヲ置クニ足ルノ時トシタ、ガ斯卡ル時期ヲ臨床上カラ殊更ニ區別シ得ルヤ否ヤハ疑ハシイ、近頃ニナツテカラ、カク時期ノ區別ハ實際上、仲々ニ出來得ベキコトデナイカラ、寧ろ病機ガ進ンダ程度カラ見テ都合ニ別ケタ方ガヨリ適當ナルコトヲ主張スル人が出來タ、即チ例ヘン Spiegel, Schröder & Mennes, Turban, Weicker, 氏等ノ如キデ、何レモコノ十年前以來ノコトデアリマス Turban 氏 (1899) ノ分類ハ次ノヨリデアル、第一度ハ輕

度デ、病患ハ多クトモ一葉又ハ兩葉ニ亘リテモ半部宛以

下ノ廣ガリデ、輕度ノ濁音、肺胞呼吸音ノ變化、微細或

ハ中等大ノ漉音ヲ認メル、第二度ニナルト病患ハ其廣ガ

リガ或ハ輕度ニ於ケルト全様デアリ二葉ヲ越エヌガ病機

ガ進ンデ居ルカ或ハ一葉デアツテモ其侵シ方ガ重劇ノ場

合デアル、第三度ハ第二度ヨリモ重イ程度ニ進ンデ居ル

トキデ、輕ケレバ散在シタ病竈ニ可成リ強イ濁音ト、ソ

レニ應ジタ聽診上ノ所見ヲ認メ、又ハ廣ク連續シタ浸潤

及ビ腔洞ヲ認取スル重イノガ此レニ屬スル、

Weicker 氏 (1901) ハ Turban 氏ノ所說ニ基イテ次ノ如

キシエーマナ作ツタ、最モ氏ハ矢張り時期ト云フテ居ル

ガ從來ノ三期トハ意味ガ相違シテオルノダ、

第一期、

病理解剖上所見ニ氣管支炎、氣管支周圍炎、一側肺尖

部ノ散在性病竈、咯痰ハ全然欠如又ハ少量、

理學的所見、打診ニ通常ナルカ乃至病患ノ一葉又ハ二

葉ノ半部ニ廣延シタル片ハ輕度ノ濁音。

聽診ニ呼吸音ハ一肺尖又ハ兩側肺尖部ニ於テ粗裂、又

ハ微弱、氣管支一肺胞乃至肺胞一氣管支性。漉音、欠

如スルカ又ハ打診上變化アル部以上ニ於テ捻髮音乃至

微便中等大漉音、

第二期、

病解上ニ氣管支炎、氣管支周圍炎、兩側鎖骨上窩及棘

上窩部ノ輕度ノ浸潤或ハ他病竈ノ存セズシテ一葉ノ浸

潤、

打診上ニ著明ナル限局性濁音、一葉又ハ二葉ノ半部ハ

比較的ノ濁音ヲ帶ブ、

聽診上ニ呼吸音、濁音部以上ニ亘リ粗裂乃至氣管支一

肺胞性。漉音、中等度ノ漉音、

第三期、

病解上ニ病患ハ第二期以上、

打診上ニ強度ノ濁音、錢貨音、聲音變換等

聽診上ニ呼吸音、氣管支性或ハ壘子性呼吸音。漉音、

鑽聲、粗大ノ漉音、

右ノヨ一ニ分別ヲ試ミタ、

獨逸帝國衛生局所定ノ肺疾患者計算簿ニ示シテアル肺結核ノ區分ハ簡單デアリ、マタ實地上ニモ適用シ易イヤウニ出來テ居ル、

第一度、病患ハ一葉ノ小部ニ限局シ、殊ニ肺尖部ニ於テ

ハ鎖骨下又ハ肩胛棘下ニ擴ラザル輕度デ、小水泡性又ハ然ラザル非鑛性ノ囉音ヲ認メル、

第二度、第一度以上ニ廣延スルモ第三度ニ達セヌ結核性肺疾患、

第三度、全一葉又ハ數葉ノ全部ガ稠密トナリ、腔洞形成ノ徵候ヲ呈ス、

最近 Artbrecht 氏ガ氏ノ著書 (Pathologie u. Therapie der Lungen-schwindsucht, 1905) 症候論ノ條下ニ書イテアル

ノヲ見ルニ、氏ハ從來ノ分別ノ仕方トハ觀察点ガ違フカラ特ニ此等ニ就イテハ論及シナイガ、自分ノ推奨スル三期分類ハコーデアルトシテアル、第一期。一箇又ハ數箇ノ蠶豆大―棒實大ノ乾酪竈ガ一側肺尖、マレニ兩側肺尖

ニ存スル場合、或ハ稜粒大乃至多クハソレヨリモ大ナル灰白結節ノ一集簇ガ存スルキデ。肺局處カラ發起スル自覺的症狀ハ欠ケル、又ハマレニ反覆發來スル氣管支加多兒ノ爲メニ咳嗽ヲ發スルコトガアル、又トキトシテハ上胸部或ハ肩胛骨間部ニ多クハ甚ダ隱顯出沒性ノ刺痛感ヲ起ス、又ヒドク頻回ノ警咳ヲ呈スル位ニ過ギヌ、全身症狀トシテ價値ヲ置クベキ數者殊ニ即チ貧血ト盜汗デアル、他覺的、打診上ニハ一側殊ニ多クハ右側ノ鎖骨上窩部ニ虛性又ハ短性ノ打診音ヲ呈シ、此際棘上窩ニハ同側ニ濁音ヲ有スルコトアリ又ハ之レヲ欠ク、而シテ斯様ノ變化ガ結核性ナルコトハ、コ、ニ打診音ノ顛倒、斷續性呼吸音ガ存スレバ益々確カデアルシ、猶、他側ト比較シテ見テ呼吸音ガ微弱又ハ銳利デアリ、鎖骨ノ肩峰端ガ他側ヨリモ低位ニアルキハ確カニソレト云フコトガ出來ル、第二期へ移リ行クト濁音部ガ擴ガツテ鎖骨上窩カラ下窩へ及ボシ又棘上窩ニ亘ル濁音ヲ呈シテクル、然シコレデ第二期ガ完成シタトハ云ハレヌ、是レ上記ノ濁音ガアリ或ハ上葉

全部ガ濁音ヲ呈スル様ニナツテモ、ソレガマタ減退シテ來ルヲガアルカラデ、コ、ニ第一期ニ特異ノ變化ガ以前ニ存在シタ様ニアルヲガ必要デア、而シテ斯様ニ兩期ノ區劃ハ移リ行キハアルガ、コ、ニ明確ナ限界線ヲ呈スルヲガアル、ソレハ時トシテ疾病ノ第一徵候トナツテ現レルヲノアル咯血デ、肺尖部ノ小サナ乾酪性、壞疽性ノ病竈ガ周圍組織カラ脫離スルニヨツテ起スノデ、多數ノ場合ニハ此時ニ濁音ヲ現ハシ、シカモ上葉ノ大部分ニ亘ツテ認メル、而シテ適當ノ治療法ニヨツテ濁音ハ消失、又咯血ニヨツテ起ツタ諸症モ除カレルヲガ稀レデナイガ、然シ濁音ニ氣管支呼吸音ヲ表ハシテ、持續スルヲガアル、コレハ第一ノ病竈周圍ニ剝脫性肺炎ノ起ツタ證左デ、此剝脫性肺炎組織ノ竈狀破壞ハ有熱性ニ又ハ熱ヲ起サズニ行ハレ、コ、ニ小腔洞形成ノ基礎ヲ作り、其周圍ニハ纖維性ノ稠密ヲ呈シ、其部ノ機能不全ヲ惹起ス、又癥痕退縮ノ方法デ腔洞ノ縮小ヲ來シ、乾酪部分ヲ包裹スル様ニモナル、勿論、カクノ如キ咯血ガナクモ第二期症

ヲ呈スルノデ、此場合ニ最初ノ結核竈ノ周圍部ニ起ル剝脫性肺炎ノ病機ノ原因ヲスルノハ殆ンド毎常、間欠性ニ來ル氣管支加多兒デア、若シ上述ノ變化ガ兩肺尖ニ來レバ、何レカ一側ガ變化ガ著シイノヲ常トスル。第三期ノ特徵ハ擴延性ノ組織破壞機轉デ、高度ノキハ上葉全部ガ一腔洞ニ化シ、其周圍ニ肥厚シタ肋膜ヲツケ、腔内ニハ強固ナ血管ガ横ツテオルト云フ状態ニナル、此時期ハスベテ第二期カラ由來シタモノトハ限ラナイ、而シテ第二期デ少シク緩徐ナ經過ヲトツタキニハ一部分ガ乾酪化シ破壞スルケレド其周圍ニ纖維性ノ稠密ヲ呈スルノデア、第三期デハ悉皆（一括シテ en bloc）乾酪化ニ陥リ、擴延性ノ破壞機轉ハ次第二連續、集合シテ來、シカモ周圍ニ稠密ノ組織ヲ作ラナイ、コレガ兩者ノ病解上ノ差違点デア、Aufrecht 氏ハ實ニ大畧上ノ様ニ述ベテオル、余程適當ナ區別ト思フ、

爰ニ特ニ生ガ同意ヲ表スル區別ノ仕方ハ本年六月發行ノ Zeitschrift für Tuberkulose Bd. XI. Heft 1. ニ載ツテオ

ル Ueber klinische Formen der chronischen Lungen-tuberculose, von Dr. F. Gabrielowitsch,デアリマス、上來記述シタ様ニ、コレマデノ區別ハ三期トカ三度トカノ病期又ハ病度ニヨツテ分割サレテアルガ、氏ハコレヲ全ク打テ壞シテ病形ニヨツテ分類シテアル、今氏ノ所論ノ必要ナ部分ダケ摘録シテ見ヨ、

臨床上ニ最モ都合ヨク原發性ト結發性トノ二大部ニ區別サレル、ソシテ其各症ノ特徴ハ

甲、原發性症、

- 一、良好ナル治癒傾向、
 - 二、病患部ハ限局性デアリ、病竈ト健部トノ間ニハ明カニ限界ガアル、
 - 三、屢々咯血ヲ起スモ、多クハ熱ヲ伴ハナイ、
 - 四、マレニ熱昇騰
 - 五、屢々乾性肋膜炎、
 - 六、全身ノ關係良好、
- 乙、續發性症、

- 一、不良又ハ比較的の不良ナル治癒傾向、
 - 二、病患ハ廣ク漫延ス、
 - 三、咯血ヲ起スコトハ稀レデアアルガ、然シ毎常熱ヲ伴フ、
 - 四、熱ハ屢々存シ且ツ大多數ニハ高温、
 - 五、治癒シ難キ他臟器ノ合併症ヲ起ス、
 - 六、全身ノ症狀ハ不良又ハ比較的の不良ナリ、
- 而シテ各症ニ屬スル病形ハ原發、續發症トモニ四種ニ分ケテアル、即チ

甲、原發性症、

- 一、乾性結核症、
- 二、加多兒性結核症、
- 三、纖維性結核症、
- 四、破潰性結核症、

乙、續發性症、

- 一、轉移性氣管支肺炎、
 - イ、纖維性症
 - ロ、破潰性症
 - 二、結核性肺炎、
 - イ、纖維性症
 - ロ、破潰性症
- トニ分ケテ、其各ノ所見ハ次ノ如クデアアル、

原發症

慢性、乾性、肺結核、Tuberculosis pulmonum chronica
 sigca.

病解上、一側肺尖部ニ既ニ乾酪化ニ陥レル纖維性小結
 節存、又ハ滲出性—乾酪性病竈ヲ認ム、此近部ノ肋膜
 ハ癒着乃至肥厚ヲ呈シ、殊ニ肩胛部ニ存スルコト多シ、
 臨床上、コノ結核竈ノ占位ハ多クハ終末氣管支分岐及
 肺胞道ニ存スルカラ、肺組織ノ緊張性ハ减退シ、空氣
 含有量モ減少ス。夫レ故打診上打診音ノ差違即チ輕濁
 音ヲ鎖骨上、又肩胛棘上ニ認メ。聽診上ニハ銳利、粗
 裂ノ呼吸音ヲ發ス、コ、ニ肺膨脹不全ヲ起セバ肺尖部
 ノ吸氣音ハ減弱スル、尙病機ガ進メバ銳利又ハ延長シ
 タル呼吸音ヲ呈シ、囉音又捻髮音ヲ欠如スルコト多キモ、
 屢々肋膜炎性摩擦音ヲ聽ク、
 合併症、(他臟器ノ結核症)全然欠如、
 治療後、速ニ全キ治療ヲ見ル (Restrictionsform)、病
 解上、完全ナル癥痕形成。臨床上、濁音減少、呼吸音

益々肺胞性トナリ、時トシテ摩擦音消失、又捻髮音モ
 存セス。治療後ノ作業能力 Leistungsfähigkeit, 全ク保
 タル、
 加多兒性症、F. p. ch. catarrhalis.

病解上、乾性症ノ連續的發育ヲ呈シタルモノトスベク
 即チ纖維性小結節ハ大部分ニ亘リ乾酪性物質ニ移行
 シ、滲出性—乾酪性變化ヲ起ス、
 臨床上、濁音ハ鎖骨下部及棘上窩部ニ亘リ即チ上葉ナ
 ルモ肩胛隅ヲ超ヘ又部分ニ証明ス。呼吸音、微弱及銳
 利ナル呼吸音、甚ダ屢々捻髮音、前面ニハ鎖骨下、後
 面肩胛部ニ於テ肋膜炎性摩擦音、
 合併症、一五%、能ク治療シ得、
 治療後、約九〇%ハ療治中外觀的ニ治ノ傾向ヲ示シ、
 病解上ノ Restrictionsform ニ赴キ得ル傾キアリ、然シ
 加多兒症狀ノ全消失ハ三〇%、減少ノ者四〇%、不變
 ノ者二〇%、約一〇%ハアラユル治療ヲ施スモ纖維性
 症ニ移行、治療後、病解上、新生纖維性組織ニヨリ健

康部ト病變部トノ間ヲ限界ス、臨床上、濁音減少、呼吸ハ明瞭ニ聽取シ得ベク、捻髮音全ク消失(三〇%)。作業能力、大多數ハ完全ニ保タル(九〇%)、而シテ數年無事、一〇%ハ早期死又ハ速ニ作業力ヲ失フ、

纖維性症、T. p. ch. fibrosa.

病解上、乾酪竈ハ漸徐ニ周圍組織ニ進入シ行き、且ツ全時ニ乾酪物質ノ液化ヲ致シ、包裹囊ヲ穿破シテ、小腔洞或ハ結核性腔洞ノ形成ヲ起ス、

臨床上、濁音ハ著明トナリ上葉ニ亘リ、又一部下葉ヲ侵ス、肩胛隅ヲ超エズ。呼吸音氣管支性或ハ銳利ナル氣管支性呼吸氣音、捻髮音、屢々小水泡性羅音、摩擦音ハ肩胛部、液窩線部分及乳房部、

合併症、二十五%

治療後、七〇%ハ Restitutionsform トナルベキ傾向アリ、治療中加多兒症狀ノ全ク消失スル者一〇%、一部分ノ者四〇%、不變化ノ者二〇%、破潰性症ニ移行スル者三〇%。治癒ハ病解上、乾酪物質ハ除去セラレ、

潰瘍ハ清潔トナリ、腔洞壁ハ新生小皮膜ニヨリテ蔽ハレ、収縮ヲ起ス、而シテ腔洞ノ縮小又ハ全ク消失ニ至ル。臨床上、濁音界ノ縮小、氣管支性呼吸音ハ氣管支一肺胞性トナル、羅音ハ全ク消失(一五%)。

作業能力、保持サル(七〇%)而シテ三―六年間、三〇%

破潰性症 T. p. ch. ulcerosa.

病解上、既ニ成立シタル腔洞ノ乾酪化及破壊ハ持續シテ、隣接組織ニ及ボシ、大腔洞ヲ形成ス、或ハ近接腔洞ノ融合ニヨリ大腔洞ヲ成ス、大多數ハ腔洞ハ上葉ニ存スルガ、マタ時トシテ一部分ハ少クトモ下葉ヲ侵ス、

臨床上、濁音ハ上葉、下葉ノ一部、而シテ極度ノ場合ニテモ肩胛隅ニ達スルノミ、多クハ前面ニ著明ナル鼓音ヲ呈ス。呼吸音、曇子性、大水泡性又ハ鏝性余響ノ羅音、肩胛、腋窩、乳房部ノ摩擦音、合併症、四〇%、

治療上、七〇%ハ Pseudotuberculosis トナリ得、然シ其

内五%ノミ眞ニ回復症トナル、二五%ハ加多兒症狀減少、四五%ハ不變化、二五%ハ病機進行ス、病解上、

腔洞内ハ清潔トナリ、壁ノ収縮スルニヨリ比較的ノ治療ハ絶望ナラズ。臨床上、濁音少シク減少、鼓音モ減

弱、呼吸音ハ尙氣管支性ナリ、囉音全ク欠ク(五〇%)。

作業力、三五%ハ二—四年間保タル、六五%ハ早期死又ハ作業力廢絶、

續發性症、成立ハ乾酪物質及破壞産物ノ小腔洞カラ咯出

スルノデハナクテ、寧ロ氣管支カラ吸入サレルノニ歸因

シ、コ、ニ滲出性—乾酪性ノ病機ヲ起シテ原病竈カラ遠

隔シタ部分即チ下葉或ハ他側ノ肺ニ於テ氣管支肺炎性或

ハ肺炎性竈ヲ形成スルヨリニナル、

慢性、轉移性氣管支肺炎、Bronchopneumonia metastatica

chronica 下葉ノ主氣管支 Hauptbronchus 内ニ吸入スル

ニヨリテ發生ス、

纖維性、轉移性氣管支肺炎 Bronchopneumonia metastatica

Thyrosa.

病解上、下葉ニ結核性潰瘍ヲ形成ス、其狀況原發性ニ於ケル纖維性症ニ全ジ、

臨床上、上葉及下葉トノ兩處ニ病竈アリ、其間ニハ通常或ハ殆ンド正常ノ組織ガアル、依テ兩處ノ濁音、其

間ニハ濁音ヲ呈シナイ。呼吸音、上、下竈共ニ氣管支性、或ハ一竈氣管支性、他竈微弱又ハ粗裂、囉音ハ欠クルヲナク、小水泡性及ビ捻髮音存シ、摩擦音ハ肩胛

及腋窩部ニアリ、

合併症、五〇%、

治療上、病解上、治癒スルヲナシ、臨床上、囉音ノ減少ヲ致ス、作業能力、比較的(一五%)ニ、二年間保タル、早期死六〇%、作業力廢絶二五%、

破潰性、轉移性氣管支肺炎、B. n. m. ulcerosa.

病解上、下葉ニ於ケル腔洞形成、

臨床上、上竈ニハ鼓音、下竈ニハ稀レニ鼓音、兩竈間

ハ打診音正常ナルカ或ハ短。上、下竈共ニ擧子性呼吸

音、殊ニ毎常下竈、兩竈間ニハ肺胞性乃至微弱呼吸音、
 瀝音ハ常ニ鏝性余響或ハ大水泡性、摩擦音ハ稀、
 合併症、五〇%、

治療上、病解上、治癒ニ向ハズ、臨床上、瀝音減ズ、
 作業能力、比較的ナルモノ一〇%ニテ一、二年間保タ
 ル、六〇%ハ早期死、三〇%ハ作業力廢絶

結核性肺炎、Pneumonia tuberculosa. 多數ノ氣管支肺炎
 竈ガ合同シテ同質性、滲出性—乾酪性結核ヲ起ス、

纖維性、結核性肺炎、Pneumonia tuberculosa fibrosa.

一肺全部ハ全ク浸潤。全肺ノ濁音、銳利ナル氣管支呼
 吸音、甚ダ小サキ瀝音、摩擦音ハ稀。合併症、五〇%。

治療後、治癒セズ、臨床上、變化ナシ、作業能力、回
 復セズ、九〇%死、一〇%ハ作業力廢絶、

破潰性、結核性肺炎、Pneumonia tuberculosa ulcerosa.

一肺全部ハ多數ノ腔洞ト化ス。打診音、鼓音、全肺濁
 音ヲオブ、呼吸音、銳利ナル壘子性、多數ノ鏝性或ハ
 濕性瀝音、摩擦音、稀。合併症、五〇%。治療後、治

癒セズ、臨床上、不變化、作業能力、約二%ハ一、二
 年存ス、死亡、八五%、一三%ハ作業力廢絶、
 上來抄録シタ様デア、

然シ其ノ余リニ Schematisch デナイカラ疑フ、然リ實ニ、
 コハ一ノ Schema ニスギナイ、實際上ニ適用サレルカド
 一カ、Gabrilowitsch 氏ハコー書キ加ヘテアル、.....

Das sind die Hauptformen, die, bei Anwendung in praxi,
 der medizinischen Statistik genaue Registrierung der
 Fälle ermöglichen werden. Die Einteilung ist dabei so
 einfach als möglich v. Irrtümer bei der Differentialdi-

agnose fast ausgeschlossen. 余ハマダ氏ノ病形分類ヲ用
 キタコトガナイカラ之ニ向フテ論批ヲ下スガ出來ナイ

ガ大体ニ於テ賛成シヨト思フ、余ハ以前カラ稍々之ニ
 類シタ病形分類ヲ試ミヨト病理解剖上ト臨床的ノ兩方

面カラ觀察シテオルケレド、未ダ完全ナ Schema ヲ作ル
 マテニ達シナイ、今、氏ノ論著ヲ讀ンデ未ダ參考トナツ
 タ点ガ尠クナイノデ、爰ニ氏ノ論文ノ大要ヲ紹介シ、從

來ノ區分法ト比較シテ見タノデアアル、終リニ極初期ノ肺結核ノ診斷ト云フコニ就テ、生前ニ肺ノ變化ガ全ク不明デアリ、又ハ僅カバリ、一或ハ稍々局音ニ呼吸音ガ粗裂ノミトカ、或ハヤ、廣ク、若シクハ狭ク……肺尖、呼吸音ガ幽微位ノ微候ガ在ルノミデ、死後、解見上、明カニ結核ヲ証明シ得ルコガ左程稀有デナイ、ソレ故病解上ノ知見カラ考察シテ佛國學派ノ Bayle ヤ Grancher 氏ナドガ主唱シテオルヨ一ニ Germe de la phthisie ト云フヨ一ナ Form ヲ區別シタクナルノデアアル、Gabrilowitsch 氏ノ分類中、最初ノ乾性症ハ既ニ臨床上變常ノアルモノ即チ結核ト確診ガツイタモノラシーガ、コレヲ少シ改メルカ或ハ意味ヲ廣メタラバドトカト思ハレル、此点ハ極初期ノ肺結核竈ノ多數ニ就テ解剖上精細ナ議論ヲタテ、オル Aübrecht 氏ノ分類ガヨリ好イト考ヘラレルノデアリマス、今後結核ノ診斷法ガ益々進歩シテ行ツテ從來疑診位ニアツタモノガ確診ノ價値ナオクダケニナルカモ知レヌシ、又新ラシイ臨床上ノ變化ガ發見

サレルカモワカラヌガ、今日ノ處デハ不知、又ハ疑診ナドノ下ニ隠クレテオル結核竈ガイクラモ在ルカラ、此点ニ向ツテ吾々ハ緻密ナ觀察、工夫ヲ凝ラシテ早期診斷ノ價値ヲ充分トシ、一時モ早ク肺癆患者ニ福音ヲ營ヘルコニ勗メルノハ、治療法ノ發見ト共ニ重要ナ義務デアルト思フ、左様、今日デモ Koch 氏以後澤山ノ學者ガ努力シテオル Tuberkulin ノ診斷上ノ應用モ、多少ハ價値ヲ措クニ足ルダローガ、未ダ全シト云フ譯ニユカヌ、本年澳醫 Pirquet 氏ガ發表シタ Tuberkulin ノ皮膚接種ニヨル呈色反應 (Allergieprobe) モ其價値ハ未ダ微々タルモノニ過ギズト云ハナケレバナラナイ、

(明治四十年十二月廿日稿)

○蛋白質ノ呈色反應ニ就テ

加藤 靜 雄

一、ミルロン液 (Millonsche Lösung)

硝酸々化汞ノ水溶液ニ極少量ノ亞硝酸ヲ含ムモノ

此液ニ蛋白質ヲ觸レシムル時ハ暗赤色ノ沈澱ヲ生ズ而シテ之ヲ放置スレバ赤色ノ凝固蛋白ニ變ズ今米粒ヲ横斷シテ此溶液ニ觸レシメ之レヲ檢スルニ外部ニ暗赤色ノ輪帶ヲ生ズ即チ米粒ハ其外部ニ多量ノ蛋白質ノ存在ヲ認ムルコトヲ得ベシ

二、「キサントプロテイン」反應 (Xanthoprotein-Reaction)
 蛋白質ニ硝酸ヲ加ヘテ熱スル時ハ亞硝酸化合物ヲ生ジ黃色ノ沈澱ヲ生ズ之レニ「アムモニア」溶液ヲ注グ時ハ黃色ニ變ズ

三、「ビユーレット」反應 (Bimete-Reaction)
 蛋白質ニ甚ダ稀釋セル硫酸銅溶液ヲ滴下スル時ハ紫色ノ沈澱ヲ生ズ此レ葡萄酒ニ固有ナル反應ニシテ即該酒ヲ稀釋シ之レニ以上ノ硫酸銅溶液ヲ注グトキハ紫色ノ沈澱ヲ生ズルコト全ク前ト相同ジ

(注意) 以上一、二、三ノ試験ハ蛋白質ノ溶液ヲ用キ以下
 四、五、六、ノ試験ハ脂肪ヲ除キタル乾燥蛋白質ヲ用ユ可シ

四、モール反應 (Molische-Reaction)

蛋白質ニ「アルファ」ナフトール」ノ酒精溶液ヲ加ヘ之レニ強硫酸ヲ注グトキハ紫色ヲ呈ス「アルファ」ナフトール」ノ代リニ「チモール」ヲ用ユルトキハ赤色ヲ呈ス

五、「アダムキルウイツ」反應 (Adamkivitz-Reaction)

蛋白質ヲ氷醋酸ニ溶解シ之レニ半量ノ強硫酸ヲ加ヘ少シク温ムルトキハ紫色ヲ呈ス

六、リーベルマン反應 (Liebermann-Reaction)

蛋白質ニ強鹽酸ヲ加ヘテ熱スルトキハ紫色ヲ呈ス

○裁判化學上極メテ微量

ナル銀ノ檢出

(Kunz-Krause)氏ノ方法 加藤 靜 雄

檢ス可キ有機物ヲ「コルベン」ニ容レ之レヲ「フレゼニウスバボ」氏ノ方法ニ依リ鹽酸及ビ鹽酸加里ヲ加ヘ重湯煎上ニテ疏解シ其溶液ノ透明トナルノ後之レヲ陶器製ノ蒸發皿ニ移シ水浴上ニテ蒸發シ酸ノ過剩ヲ去リ之レニ水ヲ

加ヘテ濾過ス可シ濾液ニ少許ノ食鹽ヲ加ヘ暗處ニ放置シ
濾紙上ノ殘渣ヲ濾紙ト共ニ灰化シ之レニ濃硝酸ノ少許ヲ
加ヘテ熱シ蒸發セシメ之レニ水ヲ加ヘテ再ビ濾過ス可シ
尙濾紙上ノ殘渣ヲ濾紙ト共ニ灰化シ前法ノ如ク反覆シ前
後ノ濾液ヲ合シ之レニ少許ノ食鹽ヲ加ヘテ暗處ニ放置ス
可シ

一二時ノ後拵出セル沈澱ヲ傾瀉法 (Dekantieren) ニ依テ
時計硝子上ニ取り之レヲ太陽光線ニ曝露ス可シ其黑色ト
ナルコトニ依テ銀ノ存在ヲ認知スルヲ得可シ

○同上色素中ニ存スル極メテ

微量ナル砒素ノ檢出

(Peter Klason 及 John Köhler 二氏ノ法)

加藤 靜 雄

今沃度酸加里及沃度加里ヲ遊離ノ砒酸ニ作用セシムルニ
其反應左ノ如シ



$H_2O_3 + 5HJ = 3H_2O + 3J_2$
此遊離ノ沃度ヲ次亞硫酸曹達溶液ヲ以テ測定ス可シ此溶
液ハ檢体ニ存スル砒素ノ量ニ從ヒテ五百分一或ハ千分一
次亞硫酸曹達液ヲ使用ス可シ
以上ノ方法ニ依ル時ハ〇、六七乃至〇、〇六七「ミリグラ
ム」ノ砒酸ハ容易ニ定量スル事ヲ得ト

○「フェノール」ノ定量

(J. F. Tocher 氏ノ法) 加藤 靜 雄

氏ノ方法ハ檢体ニ於テ他ノ酸化ス可キ物質ノ存在ヲ許サ
ズ其方法次ノ如シ

「フェノール」溶液ノ十ccニ三乃至五瓦ノ重碳酸曹達少許
ノ水及ビ五十ccノ十分一過滿俺酸加里定規液ヲ加ヘ五分
間沸騰セシメ冷後稀酸ヲ僅カ過剩ニ加ヘテ六十度ニ温
メ後過剩ノ過滿俺酸加里ヲ稀酸ヲ以テ還測ス可シ此操作
ニ於ケル反應左ノ如シ



然ル時ハ〇、〇一瓦ノ「フエノール」ハ二十九、七八ccノ十分一過滿俺酸加里溶液ニ相當ス

○空氣中ニ於ケル「ホルムア

ルデヒッド」ノ定量

(G. Romijn 氏及ヒ J. A. Voorthuis 氏ノ方法)

加藤 靜 雄

「チスレル」試薬ガ「ホルムアルデヒッド」ニ作用スル時ハ次ノ反應ニヨリ還元サレテ金屬水銀ヲ析出ス



二氏ハ以上ノ反應ニ基ヅキ「チスレル」試薬ヲキル氏ノ裝置ニ充タシ之レニ空氣ヲ徐々ニ通ジ既知量ノ沃度ノ沃度加里溶液ニ溶解セルモノヲ加ヘ沈澱ノ溶解スルマデ強ク振盪シ之レニ一、二滴ノ鹽酸ヲ加ヘ酸トナシ過剩ノ沃度ヲ次亞硫酸曹達ノ定規液ヲ以テ還測シコノ消費量ヨリ分離サレタル水銀ヲ測リ上ノ方程式ニヨリテ空中ノ「ホルムアルデヒッド」ヲ計算スベシ

○麵包中ノ脂肪定量

加藤 靜 雄

M. Weibull 氏ハ麵包ヲ分析シテ其脂肪ヲ定量セシニ其量ハ常ニ原料タル粉ノ脂肪量ヨリモ甚ダ僅カナルコトヲ實驗セリ依テ氏ハ研究ノ後麵包中ノ糊精ノ脂肪ヲ被包スルノ結果ニ歸因セルコトヲ論ゼリ故ニ其脂肪浸出ニハ百六十時ノ長時間ヲ費サザル可ラズ之ニ於テ氏ハ麵包ノ粉末ニ硫酸ヲ加ヘテ糊精ヲ破壊シ然ル後大理石ノ粉末ニテ中和シ之レヲ「ソクスレット」氏ノ浸出裝置ニ入レ其脂肪ヲ定量セリ A. D. Sokolow 氏ハ新タニ素麵ニテ脂肪定量ノ試験ヲナシ J. C. Bernthrop 氏ハ之レヲ麵包ニ應用セリ即チ麵包百五十瓦ヲ「コルベン」ニ容レ之レニ五百ccノ水及百ccノ強鹽酸ヲ加ヘ「リーピヒ」氏冷却器ヲ付シ直火ヲ以テ煮沸スルコト二時間此際液ハ褐色ヲ呈シ「チャェルロ―ゼ」及脂肪ハ不溶解物トナリテ析出ス之レヲ普通温度ニ放置シ冷却セシメ然ル後濕潤セル脂肪ノ含有セザル濾

紙ヲ以テ濾過シ沈澱ヲ冷水ニテ能ク洗滌シ濾紙ト共ニ百
度乃至百十度ニ一時間乾燥シ沈澱ハ精製海砂ト共ニ乳鉢
ニ入レヨク粉碎シ濾紙ハ細カニ切り沈澱海砂ト共ニ「ソ
クスレット」氏脂肪浸出器ニ入レエーテル或ハ石油エー
テルヲ以テ浸出シ浸出液ヲ蒸發シ其脂肪ヲ定量セリト

○肝油ノ新反應

Pharm. Centrall. No. 22. 1907

S. Yreven 氏ハ五立方「センチメートル」ノ肝油ニ五立方
「センチメートル」ノ依的兒ヲ混和シ之ニ九十二度乃至九
十八度ノ「アルコホール」二十五立方「センチメートル」ヲ
注加シ靜置シ其上層ノ澄明液ヲ扁平ナル陶製皿中ニ傾瀉
シ之ニ点滴法ニヨリ發烟硝酸(比重一、四八)ヲ加フルニ
アリ然ルキハ毎滴硝酸ノ附加ノ後速ニ暫時天青色ヲ呈ス
此混合液ハ直チニ爆發現象ヲ呈シ分解スルヲ以テ著者ハ
永ク放置セザルヲ述ベタリ

(林抄)

○染色セル尿中ノ格魯兒定量

Pharm. Centrall. No. 24. 1907

尿中格魯兒ノ定量ニ際シ殊ニ血尿ニアリテハ通常曹達ヲ
加ヘ蒸發シ硝酸ヲ注加シテ灰化シ其殘渣ヲ容量的ニ測定
スルノ方法アルノミ此ノ方法ニ代フルニ de Ridder 氏ハ
血色素ヲ過酸化水素ヲ以テ破壞スルヲ賞用セリ即チ此
目的ニハ十立方「センチメートル」ノ酸性トナセル尿ニ消
失スルニ至ル迄十「プロセント」ノ過酸化水素ヲ加ヘ振盪
スルニアリ次テ之ニ炭酸加爾叟謨ノ過剩ヲ加ヘ瓦斯發生
ノ終ルヤ否ヤ標示藥トシテ黃色格羅謨酸加爾謨ヲ加ヘ濾
過セズシテ容量的ニ測定スルニアリト

(林抄)

○フラングラ「皮并」ニ「カスカラ

サグラダ「皮」ノ有効成分

Pharm. Centrall. No. 25. 1907

H. F. Knopf 氏ノ試験ニ從ヘハ有効成分ハ大部分ハ加爾

謨塩トシテ其中ニ含有シ而シテ此加留謨塩ハ苦味ヲ有セズ且ツ瀉下ノ作用ヲ有ス此塩ハ次ノ特許サレタル處置ニヨリ容易ク完全ニ析出スルヲ得ベシト今「カスカラサグラダ」皮粉末五百「グラム」ニ約一、五「リール」ノ水ヲ以テ粥狀ニ至ル迄攪拌シ二乃至三時間放置シ屢能ク攪拌シ後之ヲ壓搾シ尙三乃至四回其操作ヲ反復セル後得タル濾液ハ稍僅ニ染色スベシ茲ニ得タル澄明ナル浸出液ヲ眞空裝置内ニ於テ全ク乾燥ニ至ル迄蒸發スベシ然ルキハ百五十「グラム」乃至百八十「グラム」ノ乾燥セル「チヨコレート」色ノ殘渣ヲ得ベシ之ヲ粉碎シ數回水ヲ含有セザル「メチール」アルコホール若クハ「エチール」アルコホールヲ以テ乳鉢内ニ磨碎スベシ其際其アルコールハ深褐色ヲ呈シ褐色ヲ呈スル物質ハ溶解セズシテ殘留ス此殘留物ヲ吸收裝置ヲ以テ濾過シ尙數回水ヲ含有セザル「アルコホール」ヲ以テ洗滌シ次テ眞空裝置内ニ於テ充分乾燥セシム然ルキハ約七十「グラム」乃至八十「グラム」ヲ得ベシ而シテ「アルコホール」性ノ浸出液ハ「アルコホール」性加里ヲ

以テ久シク分離セシメ尙沈澱ヲ生セシム而シテ此沈澱ヲ亦吸收裝置ヲ以テ濾過シ洗滌シ乾燥スルニアリスクシテ得タル加里塩ハ極メテ容易ク水中ニ葡萄酒赤色ヲ呈シテ溶解ス然レモ水ヲ含有セザル「アルコホール」偏蘇爾「リグロイン」及嚼囉仿謨中ニハ殆ト不溶解ナリ本品ハ無臭ニシテ苦味ヲ有セズ

(林抄)

○芒菁末ノ顯微鏡的試驗

ニ就テ

Pharm. Centrall. No. 38 1907

C. N. Patricot 氏ハ可檢物ヲ最初ニ偈里設林及抱水「クロラール」ヲ以テ處置シ次ノ方法ニヨリ脱色スルヲ賞用セリ而シテ次亞格魯兒酸那篤留謨ヲ以テ脱色スルトキハ久シキ時ヲ要シ決シテ完全ニアラザルヲ以テ過酸化水素モシクハ更ニ良好ナルハ稀薄シタル稀硝酸ヲ應用ス其際脱色ト同時ニ筋纖維ハ萇黃色ヲ呈スベシ而シテ二分ノ「ニグロジン」及一分ノ「サフラニン」ノ「アルコール」性溶

液ニテ複染色ヲ施行セバ角質(Ornithin)部分ノミハ「サフ
ラニシ」ニテ染色シ凡テ他ノ部分ハ「ニグロジン」ニテ染
色セラルベシト (林抄)

○規尼涅ノ檢定ニ就テ

Pharm. Centrall. No. 38 1907

J. Abensour 氏ハ「タルレイヲヒン」反應并ニ「エリトロ
ヒン」反應ヲ應用シ次ノ方法ヲ賞用セリ即チ「リ―テ
ル」中十二「ミリグラム」ノ規尼涅ヲ含有セルモノヲ檢定
シ得ベシト今可檢液ノ十立方「センチメートル」ヲ取り之
ニ貌羅謨水ヲ螢石彩ノ消失スルニ至ル迄滴加シ次テ同容
量ノ「アルコホール」ヲ加ヘテ稀釋シ之ニ一乃至二滴ノ安
母尼亞水ヲ加フルニアリ茲ニ生シタル微綠色ハ嚼囉仿謨
ヲ加ヘ振盪スレハ著シク染色スベシ又「エリトロヒン」反
應ハ「アルコホール」ヲ含有セザル弱酸性ノ可檢液十立方
「センチメートル」ヲ取り之ニ一滴ノ貌羅謨水、一滴ノ「フ
エルロ」藏化加留謨(1:10)并ニ一滴ノ安母尼亞水ヲ加

フルニアリ茲ニ生シタル赤色ハ是亦嚼囉仿謨ヲ加ヘ振盪
スルニヨリ著シク明瞭ナラシムルヲ得ベシト (林抄)

* * * * *

漫 録

○元始の醫

希臘神話より

かゝりしほごにアポローは、稚きエスクラピウスを抱
きて、當時の大賢なる老校長セイロンの許に至りぬ、こ
の師、海近き山の、灰色なせる斷崖の下、一個洞窟の裡
に棲へり。

アポロー言ひけるは、爾此の稚きものを引きとりて山
嶽、樹木、原野のあらゆる智識を教ゆべし、また彼等の
同胞に善行をなさむ爲め、要する術を教ゆべしと。

程なくしてエスクラピウスは、賢くも優しく、愛らし
くも覺ゆよき童となり、セイロンの學び子のうちにて、
比ひなき寵を得たりき。

かれは山嶽樹木原野の智識を學び、灌木、咲く花、心なき石のたもひを悟り、鳥獸人間の習ひをもすべて解しぬ。されど取りわけて孰達せしは、創傷の治癒と疾病の療法となりき、宜なる哉、今とても世の醫たらむもの、彼を技術の始祖とし將た偉人として、深く憶ひ崇び居ることや。

かれ年長けてその名よろづの國に聞こへ、人々こつりて彼を稱へぬ、そは彼れが命の友にして死の敵たりければなり。

時は知らぬ間に過ぎてエスクラピウスが癒しやりし創傷、つなぎやりし玉の緒のかすく、いくそばくと云ふを知らざりければ、地獄の王プルートはいたく怒りぬ、かれは幽冥界に青き面せる王ならずや。

われは近き日職を空しくするに至らむ、地獄の王は叫べり、彼の醫師我王國に來る人々を留めぬればと。

遂に彼は兄ジュピテルに言ひ送りて、かねて約せし義務に負むき小ざかしきエスクラピウスの振舞を許し給ふはいかにと訴へければ、大ジュピテルその歎きを聞て、逆巻く嵐雲の上に立ち、閃々たる電光を擲ち給へばさしもの大醫もあへなく逝きぬ。

しかしながら此の後、世は悲しみに満ちわたり、獸さへ木さへ石さへ泣きたるは、命の友の失せければなり。

あゝアポロー、稚き彼を抱きて師事せしめしアポローが我が子死せりと聞きし時、かれの悲しみは如何に深く彼の怒はいかに強かりけんよ、されど萬能の神ジュピテル地獄の王プルートに對ひしては、力弱き身の詮術もあらざりければ、彼は火焔黒煙立ち昇る大火山の地底、プルカンの大鍛冶場に降り、恨みある電光を作りし巨人の鍛冶等を殺戮して、我が子の讐を復したりと自ら慰み居たりき。

此の復讐にジュピテルは甚しく憤りぬ而してアポローに命ずらく直ちに我に來りて汝が暴行の罰を得よと、彼はアポローの弓矢と魔力ある縦琴と、かんばせの美と、すがたの優とを取り去りて、かたるの着らむ襪襪の衣まどわせつ、全き一歳を奴隸となりて使はれたらむまで決して歸る勿れとて、山より追ひたりける。

アポローは追はれ出でぬ、悲しからずや廣き世に一人の身なり、淋しからずや求めむに友なき身なり、凄れ果てたる彼に遇ひ給はむ人々は、光輝く戀の男神、銀弓たばさむ有情の子よと、夢むる人もあらざらんかし。

かくて死は永しへに我が世に在り、ろは大ジュピテルの御旨なれば。

會報

○叙任及辭令其他

十月三十日(宮内省)

叙正六位

從六位

上田 計二

十一月十一日(本校)

金澤醫學專門學校書記

山本兵三郎

御用有之上京ヲ命ス

十一月七日(内閣)

金澤醫學專門學校教授正六位

佐々木 達

陸叙高等官三等

十一月三十日(本校)

金澤醫學專門學校產科學婦人科學副手囑託

丸谷熊次郎

依願囑託ヲ解ク

十二月十三日(本校)

笹井仁作

雇申付

月俸金拾貳圓給與

十二月十六日(文部省)

四級俸下賜

金澤醫學專門學校教授

小川勝陳

金澤醫學專門學校教授

宮田篤郎

五級俸下賜

十二月二十三日(本校)

林 篤

自今月手當金貳拾圓給與

影山清美

病理學授業補助ヲ囑託ス

十二月二十四日(本校)

金澤醫學專門學校教授

宮田篤郎

耳鼻咽喉科學上取調ノ爲上京ヲ命ス

金澤醫學專門學校眼科學副手囑託

堀田圭三

依願囑託ヲ解ク

十月十八日(本校)

醫學得業士

伊藤 喬

外科學無給副手ヲ命ス

十一月五日(本校)

醫學得業士

小泉永宜

内科學無給副手ヲ命ス

十一月二十八日(本校)

醫學得業士

小泉永宜

依願內科學無給副手ヲ命ス
十一月三十日(本校)

各通

內科學無給副手ヲ命ス

各通

外科學無給副手ヲ命ス

各通

醫學得業士	今村文碩	醫學得業士	橋爪元吉	醫學得業士	玉森法靈	醫學得業士	田中基保	醫學得業士	吉田宗一	醫學得業士	真澤貞一
同	布村祥	同	鷹見義郎	同	岡	同	平澤謙齊	同	五井康平	同	古屋榮治
同	高野宗重	同	桑原益方	同	藤井一雄	同	池田茂	同	深澤治三郎	同	池田茂
同	平松敏四郎	同	藤井一雄	同	池田茂	同	深澤治三郎	同	池田茂	同	池田茂

眼科學無給副手ヲ命ス

細菌學無給副手ヲ命ス

解剖學無給副手ヲ命ス

十二月十三日(本校)

會計課兼圖書課員ヲ命ス

十二月二十三日(本校)

依願內科學無給副手ヲ命ス

十月十日(陸軍省)

免本職金澤衛戍病院附被仰付

十月二十一日(內務省)

任石川縣技師

叙高等官八等年俸參拾圓下賜

十月二十二日(陸軍省)

補鐵嶺衛戍病院附

補鐵道聯隊附

醫學得業士 中村欣一郎

醫學得業士 佐口榮

醫學得業士 佐口榮

醫學得業士 池田茂

醫學得業士 湯淺啓一

醫學得業士 越野義三郎

醫學得業士 速水昇

醫學得業士 並河權六

醫學得業士 並河權六

醫學得業士 並河權六

醫學得業士 並河權六

陸軍二等軍醫 早瀬 三 求

步兵第七聯隊附一等軍醫職務心得被免步兵第六十九聯隊附一等軍醫職務心得被仰付

陸軍三等軍醫 高桑 勇 次 郎

步兵第三十五聯隊附被免補步兵第六十九聯隊附

陸軍二等軍醫 小 西 俊 三

補步兵第七聯隊附

關東陸軍倉庫附陸軍二等藥劑官 長 崎 謙 治

免本職補旅順衛戍病院附

敦賀衛戍病院陸軍二等藥劑官 淺 井 久 太 郎

免本職補岐阜衛戍病院附

陸軍三等藥劑官 林 京 次 郎

補敦賀衛戍病院附

金澤衛戍病院附陸軍三等藥劑正 野 崎 仙 太 郎

免本職補大坂衛戍病院附

韓國駐刺衛戍病院附陸軍三等藥劑官 上 田 美 雄

免本職補東京第一衛戍病院附

陸軍三等藥劑官 湯 淺 啓 一

補金澤衛戍病院附

十月三十一日(陸軍省)

東京第一衛戍病院附陸軍二等軍醫 太 田 長 作

免本職重砲兵第二聯隊附一等軍醫職務心得被仰付

十一月二十三日(陸軍省)

鐵道聯隊附陸軍三等軍醫 並 河 權 六

免本職補近衛步兵第一聯隊附

步兵第三十五聯隊附陸軍一等軍醫 竹 下 麗 三 郎

免本職補野砲兵第九聯隊附

十一月二十七日(陸軍省)

陸軍二等軍醫 松 村 魁

輜重兵第五大隊附一等軍醫職務心得被免工兵第五大隊附一等軍醫職務心得被仰付

步兵第三十六聯隊附陸軍二等軍醫 吉 井 康 次 郎

免本職步兵第三十六聯隊附一等軍醫職務心得被仰付

十二月八日(陸軍省)

任陸軍二等軍醫正 陸軍三等軍醫正 野 口 詮 太 郎

補關東都督府陸軍軍醫部部長

十二月九日(陸軍省)

名古屋衛戍病院附陸軍三等藥劑官 稻 崎 龍 助

免本職補高崎衛戍病院附

十二月十八日(海軍省)

海軍少軍醫 小 出 貞 治 郎

免海軍軍醫學校練習學生補吳海軍病院附

十二月二十一日(陸軍省)

陸軍一等軍醫 小 林 茂 樹

補歩兵第二十八聯隊附

陸軍一等軍醫 關口通太郎

補歩兵第一聯隊附

陸軍一等軍醫 佐伯亮齋

補歩兵第十七聯隊附

陸軍一等軍醫 駒井定哉

補歩兵第四十聯隊附

陸軍一等軍醫 増田貞吉

補歩兵第七聯隊附

陸軍一等軍醫 戸田伊代次

補輜重兵第六大隊附

陸軍一等軍醫 早瀬三求

補歩兵第六十九聯隊附

陸軍一等軍醫 清水秀夫

補基隆重砲兵大隊附

陸軍一等軍醫 太田長作

補重砲兵第二聯隊附

陸軍一等軍醫 藤浪謙

補歩兵第一聯隊附

陸軍一等軍醫 松村魁

補工兵第五大隊附

陸軍二等軍醫 山本幹雄

補第三師團軍醫部々員

▲見習醫官並に見習藥劑官の入隊 陸軍衛生部依託生徒たりし永井人雄君外十九名は頭書の聯隊へ入隊せられた

歩兵第七聯隊

見習醫官 永井人雄

同 猪飼善助

同 山田茂樹

同 林秀雄

同 吉田繁治郎

同 武藤匡一

同 栗原治三郎

同 大田勘市

見習藥劑官 大澤誠一

同 寶達佐市

同 井口爲四郎

歩兵第三十五聯隊

見習醫官 佐藤武

同 鈴木修一郎

同 市川久多

同 原季

同 朝日吳

▲特別會員たる陸軍軍醫の昇進 去る二十一日を以て陸軍二等軍醫小林茂樹君外十名は陸軍一等軍醫に陸軍三等軍醫吉田幡誠君外十八名は陸軍二等軍醫に昇進せられたり其氏名左に

任陸軍二等軍醫

見習醫官	赤尾肇三
同	柿澤雅一
同	山川宮三
同	佐々木 靜
陸軍二等軍醫	小林茂樹
同	佐伯亮齋
同	關口通太郎
同	駒井定哉
同	増田貞吉
同	戸田伊代治
同	早瀬三求
同	清水秀夫
同	太田長作
同	藤 浪 謙
同	松 村 魁
陸軍三等軍醫	吉田幡誠

陸軍三等軍醫	田 中 潮
同	小原徳太郎
同	齋藤賢徳
同	松山俊夫
同	江藤潤一
同	山本幹雄
同	池田恒太郎
同	石橋四郎
同	佐野愛二
同	速 水 昇
同	朝倉重敏
同	阿部時雄
同	仙場昌秋
同	前田豊作
同	井上只次
同	溝口美代次
同	高 伊三郎
同	永井學造
▲小野海軍少軍醫	特別會員たる小野醇吉氏は十二月二十四日付を以て海軍少軍醫に任せられ海軍々醫學校練習學生仰付られたり
▲依託生徒の任命	左記の諸氏は十一月一日附を以て陸

軍衛生部依託生徒を命せられたり

吉澤 祐寛 鈴木 琢磨 才田 猶次
奥山 正雄 吉川 友信 守部 廉次郎

(以上醫學科第四年級生徒)

布目 喜多 高田 茂一 笠松 彦次郎
富家 光雄 小林 良二 坪田 義門
宮城 篤珍

(以上醫學科第三年級生徒)

原 直壽 牛木 謙吾
(以上藥學科第三年級生徒)

▲新得業士諸氏の就職

高野 宗重
深澤 治三郎
桑原 益方
藤井 一雄

佐木内科無給副手

平松 敏四郎
布村 文碩
今村 文碩

山崎内科無給副手

橋爪 元吉
古屋 榮治郎
鷹見 義郎

外科第一部無給副手

五井 康平
岡井 康平
平澤 謙齊

宮田外科無給副手

田中又太郎

齒

高安眼科無給副手

玉森 法靈
田中 基保
吉田 宗一
眞澤 貞一

高木 琢磨 金澤病院外科第二部

井上 松三郎 金澤市堅町飯森治療院

西村 銀太郎 新潟縣新瀉病院

渡嘉敷 唯續 台灣台北醫院内科

千葉 葉茂 台灣台北醫院外科

額 又太郎 東京醫科大學佐藤外科教室

岡 一雄 高岡市東病院

若林 古福 自宅開業

谷 道清 歩兵第三十五聯隊一年志願兵

塚本 富彦 栃木縣宇都宮栃木縣立病院

塚崎 茂 自宅開業

津田 博明 東京帝國醫科大學小兒科

中村 欣一郎 佐々木内科

増井 榮太郎 日本赤十字社滋賀支部病院

天野 長重 金澤市彦三町金城療病院外科

南 茂吉 日本赤十字社和歌山支部病院

數見 宗一郎 富山縣立藥業學校

前田 興三 横濱衛生試驗場

佐口 榮 本校解剖學無給副手

長村 吉太 岐阜市岐阜病院

山田外來雄 金澤市彦三町金城療病院外科

池田 茂 名古屋好生館醫員

金澤醫學專門學校書記 増野與三九君の遠逝

本校書記として數年間勤績、會計課及圖書課員の職に就き頗る精勵、敏腕の稱あり、また本會には書記となり盡粹する所尠なからざりしが、昨夏不幸二豎の侵す所となり十月一日遂に逝去せらる、享年廿六歳、嗚呼、蓋天何んすれば此前途多望の好青年に年を籍さざりしか、謹んで吊す焉、

特別會員津田作平君の訃

君は富山縣の人、明治三十八年九月本校醫學科を卒へ、郷里に於て業を開きつゝありしが、宿痼漸く募り、舊歲十二月十三日廿五歳を一期として遠逝せらる、可惜。

君、人爲り温厚、寡言にして卒直、校に在るや孜孜惜むなく、出でて篤實の譽高かりしも、今や青苔の下、長へに骸をとゞむ。噫。

通常會員布目喜多君の逝去

本校醫學科第三年生なる全君は客臘廿一日突然病魔に斃る。君は明治十八年四月愛知縣愛知郡荒子村に生れ、長じて怜悟、愛知第一中學校を卒へ、燃るが如き前途の希望を懷きて我校に入りしは明治卅八年九月なりき、爾來孜孜學窓にいそしみ、學業の進境大に見るべきあり、全級生中將來有爲の士を以て囑望せられしが一朝二豎の襲ふ所となる、噫。やがては花なるべき青年、廿三年の短生涯にしてあたら有爲の才を懷きつゝ、恨みを千歳に遺しにき、嗚呼惜哉。

○卒業生諸君を送る

わが百四十の新醫、藥得業士諸君!!
諸君が幾多の希望を懷き、彼岸の光明を夢みつゝ、遠く、近きより來りて我校に學びてよりや茲に四又三星霜を閱しぬ、其間螢雪の勞苦よく之を意とせず、五條の校訓また之を忘却するなく、所定の課程を修了し、今は卒業の榮譽を負ふて社會の活舞臺に上ら

れんとす。

諸君、諸君の前途は實に多忙なり、見よ、近く互に非ずや、彼の三千年來主として植物性薬餌に委ねし薬籠は今や漸く動物性化學物質によりて代はられんとし、日に新たなる么微學上の學理また實際に相逢するの時蓋し遠きにあらざらんとす。此時に當り諸君が多年切磋によりて齊し得たる新進の敏腕に期待する者甚だ大なる所なり。諸君が活動の範圍や誠に狭小ならじ、豈、雷に五千万民衆に對する三万六千の醫師と三千有余の藥劑師により經營せられつゝある邦土のみに限らんや、近く滿韓の地は將に諸君の活動によりて開拓せられざるべからず、遠くは龐大なる隣邦清國に於ける貳百、僅々數者を有する沿海洲、果た米國各洲に散在する三十内外のわが先進は活動的青年の渡來に俟つ所切なりと傳ふ。夫れ斯くの如く多望なり、廣大なり。然れども憶へ、諸君、已往幾年の學修は唯前途の志業に對する素地の幾部分に過ぎざるのみ、諸君の手腕既に然り、加ふるに社會の事頗る紛雜にして動もすれば憧るゝ成功に對し幾多の艱難、障礙を與へんとはすなり。然らば到達し得べき行路や如何に、是れ全く健闘にあり、

勉學、修養にあり、耐忍、鍛練にあるなれ。願くは諸君、幸に自重自愛怠るなく、遼遠なる彼岸に向ひ、心して行き給へや、勇ましく。

余輩爰に朝夕相親める諸氏に別るゝに蒞み滿腔の熱誠を捧げて、諸君の鹿島立を祝し、併せて前途の成業を祈る所以、聊か記して別辭とす。

○醫藥學科卒業證書授與

客歲十一月八日午後二時より濟々堂にて新卒業生に卒業證書を授與せられ、後、校長の告辭ありき、終りて、例によりて十全會大茶話會あり、小川部長、高安、櫻井、の諸教授、池田助手高野得業士の演説、余興數番、ありて六時閉會せり。

○新卒業生

本年十一月八日卒業せられたる醫學科並に藥學科の諸氏族籍氏名左に記す (イロハ順)

醫學科卒業

新瀉縣平民	猪飼善助
福井縣平民	伊坂春
石川縣平民	市川久多
福井縣平民	池田茂

(會報)

山形縣士族	新瀉縣平民	沖繩縣士族	埼玉縣平民	岡山縣士族	富山縣平民	福岡縣平民	福井縣士族	福岡縣平民	三重縣平民	千葉縣平民	富山縣平民	高知縣士族	富山縣平民	福井縣平民	石川縣平民	東京府士族	奈良縣平民	滋賀縣平民	山梨縣平民	靜岡縣士族	石川縣士族
千葉茂	遠山正輝	渡嘉敷唯績	丹羽玄純	西村銀太郎	橋爪元吉	林田信平	伴鐸也	原田悅五郎	原季	荻原卯太郎	林可一	濱田真鉏	林秀雄	橋本正次	池野清政	井上元	池川周次郎	池谷運平	今村文碩	稻崎重助	井上松三郎

Okawa

奈良縣平民	石川縣平民	和歌山縣平民	山形縣平民	石川縣士族	三重縣平民	新瀉縣平民	靜岡縣平民	新瀉縣平民	福井縣平民	長野縣平民	三重縣士族	奈良縣平民	石川縣平民	長野縣平民	宮城縣士族	福井縣平民	富山縣平民	新瀉縣平民	長野縣平民	石川縣平民	富山縣平民
吉田繁二郎	吉田宗一	吉田文平	加藤慧治郎	柿澤雅一	寬連橋	川崎汎三	加藤鍬作	春日望	渡邊關重	若林古福	岡一雄	岡忠治	岡田秀造	小野醇吉	岡忍	長村吉太	老川雪房	小黒仁太郎	太田勘市	額又太郎	布村祥

藥學科卒業生

岐阜縣平民	◎ 佐 口 榮
福井縣平民	◎ 笹岡芳名
和歌山縣平民	南 茂 吉
福井縣平民	三田村 直
廣島縣平民	水口 史 郎
京都府士族	水 口 順
石川縣士族	白 井 濟
福井縣平民	志 田 主 稅
石川縣士族	平松敏四郎
石川縣平民	平 澤 謙 齊
新瀉縣平民	平 澤 嘉 圓
新瀉縣平民	諸橋林太郎
岐阜縣平民	說 田 順 一
山形縣士族	仙 場 松 齋
愛知縣平民	鈴木修一郎
新瀉縣平民	須 貝 猪 次
靜岡縣平民	鈴 木 茂
富山縣士族	井口爲四郎
熊本縣士族	六 嘉 孝 光
石川縣平民	寶 達 佐 市
岐阜縣平民	大 澤 誠 一

○優等卒業生の賞品下賜

本年度より醫、藥學科卒業生中特に操行、學術ともに優等のもの數名に賞員を下賜せらるゝ事となりしを以て、其第一回として本年卒業生中此の月桂冠を戴きしは左記の諸氏なり、

富山縣平民	數見宗一郎
富山縣平民	丹波 橘 二
福島縣士族	高 野 友 衛
三重縣士族	田中新太郎
福岡縣士族	津 田 弘
東京府平民	日下部 秀太郎
富山縣平民	松井長兵衛
香川縣士族	前 田 興 三
新瀉縣平民	藤 卷 國 平
大阪府平民	岸岡龜之助
富山縣士族	森 正 英

醫學科卒業生

佐 口 榮
中 村 欣 一 郎
永 井 人 雄

藥學科卒業生

丹羽 橘 二

各、銀側時計壹個宛

あ、諸氏が在學四、三年の間、品行方正にして、よく學生の模範となり、踴勉また衆を越へて、秀逸なる學才とは茲に斯の名譽を負へるなり、希くは諸氏、校を去れるの後も自己本能の發揮に励め斯界の木鐸となり、明星となられん事を、

○講話部記事

●十全會講話大會

第七回大會は四十年六月一日午前九時より本校濟々堂にて開催、特別會員、市内、郡部の醫師、通常會員にて滿場立錐の余地なく頗る盛會なりき、今、講話せられしもの、内、醫藥學に關係ある演題は次の如し、猶會場にて笹岡君のピエドラ標本、佐々木教授の數十の鏡的標本は排列せられ、病理教室供覽室には小原講師の標本數十臺の顯微鏡によりて供覽せられぬ、

▲歐米の競技的遊戯と衛生的關係

通常會員

猪飼善助君

▲近視手術的療法に就て

特別會員

堀田圭三君

▲トラホームクエツテル

全

君

▲ピエドラ標本供覽

通常會員

笹岡芳名君

▲アクチノミコーゼの一例

全

君

▲ヒール氏吸引療法及其實驗例に就て

全

君

▲脊髓性偏癱

特別會員

島田吉三郎君

▲佝僂病骨の顯微鏡的標本供覽

特別會員

小原芳雄君

▲晚型佝僂病に就て

全

君

▲興味ある胸壁剝創に就て

特別會員

波多野傳三郎君

▲討論

特別會員

宮田教授

▲諸種のプレバライト供覽

特別會員

佐々木教授

▲獨逸醫學界私見

特別會員

奈良八郎君

▲試視力表に就て

特別會員

奈良八郎君

▲十二指腸虫と胃酸との關係

特別會員

林篤君

▲眼球外傷の一例

特別會員

加藤慶三君

▲小兒心臟の比較的濁音界に就て

特別會員

岡本京太郎君

▲白点状網膜炎の一例 特別會員 高安 教授
 ▲Erythrasmitoxin に就て 特別會員 上田 教授

●に斷り、大會記事は當時の誌上に掲載すべき筈にて講話部、雜誌部、委員數名の手にて詳細筆録せられたりしも、其後誌稿輻湊の爲め漸次繰り下げ、且つ其後に年度更りにて委員の異動あり、何にやかやにて遂に其原稿を紛失したれば、今こゝに其演題のみを載することゝせり、これ深く演者諸氏並に會員諸君に謝する所なり、
 (雜誌部委員よし生)

●十全會講話會第四十例會記事

本學年第一回例會は十一月十六日午後六時より本校濟々堂にて開催せり、校、病院及市内在住の特別會員諸氏、通常會員諸君の來り會するもの實に三百余名、出演者また多數にして非常の盛會なりき、今左に講話の概要を記さむ

▲開會の辭

湧くが如き喝采の下に悠然顯はれ出てられたるは上田部長なり、先づ開會の辭を述べ併せて本會の主旨が強ち醫事に關したることのみを歓迎するにあらずして又他の所感及び外國語學上の講演をも渴望する旨陳べられたり、
 ▲第一席 醫者と政治家 通常會員 片岡 正 雄君
 悠々逼らざる快辨を以て滔々論及せらるゝ所、古今縦横

に亘り、論鋒よく現代の欠陥を衝けり、

▲第二席 糖分に就て 通常會員 重橋 重作君

先づ糖の化學的成分を説明し且つ古來の實驗例を引きて糖が吾人活力の一大源泉たることを述べ終りに砂糖使用量の増多と文明開發の進歩と並行しつゝある我國の狀態を陳述せられたり、

▲第三席 所謂面疔の病理及び療法

通常會員 伊藤 哲一君

氏は今夏和歌山市花岡外科病院及び自宅に於て親しく研究せられたる面疔に就ての實驗談を語りて曰はく先づ病原としては「ローゼンバツハ」氏の唱へし如く葡萄狀球菌にして、その蔓延の迅速なるは、次の三点に起因す

- 一、顔面の皮下組織は粗にして炎症を助長するに足る、
- 二、顔面には淋巴管の富饒なること及び皮脂腺の多きによる、
- 三、顔面筋肉の運動により發炎体及膿汁を周圍に驅逐

蔓延せしむ、

次に發生部位としては上唇及び鼻中隔に多く殊に上唇にては右側に多數なり是れは解剖上淋巴管及び靜脈管が右側に於て發育すること多く且つ吾人の多數は右利にしてしかも行住坐臥右手を顔面に運ぶ機會多く、従つて不潔

物を持ち來すことも右顔が左顔より多きに由るならむか、年齢の關係に若年者に多きもの、如し、これ春機發動期前後は身体皮膚の發育盛んにして皮脂腺の解剖的變化も著大なり如斯關係より該病原体に侵襲の好機會を附與するものならむか、次に男女關係、生活狀態、頻發時期、流行性、危險、死亡數等に就き委細に陳述せられ、最後に其療法の主要を述べて、特に推奨すべきは最近廣く應用せらるゝ「ビール」氏吸引療法にして、早期には其れ單獨に、又小切開を加へて之れを用ゆれば迅速に治に赴き殊に全く或は著しく癩痕を残さずして消散せしめ得べしと、

▲第四席 「ホドキン」氏病に就て、附患者及全患者血液標本供覽、非常會員 齊藤 醫員

君は壯年の一男子を伴ひ來り、今日供覽せんとする患者は「ホドキン」氏病即假性白血病の疑ひあるものにて、本患者入院後漸く數日なるため未だ詳細の検査を遂げざるも、ここに供覽する次第なりとて、先づ假性白血病の本態、定義、原因、症狀、合併症、豫後、治療法等を悉細に論述し、次で本患者の已往及現在症を述べられたり、今その大畧を記載せんに、

已往症—遺傳的關係なし、患者生來健全なりしも感冒にかゝり易き素因あり、小兒期に麻疹を經過し又麻刺利

亞に罹りたることあり、

本病起始—本年七月中旬頃麻刺利亞にかゝり七、八回の發作を繰り返せり、其後全身の倦怠を覺え、八月末腹部に腫瘍あることを自覺し、同時に左鼠蹊部にも全様無痛性の腫瘍を認めたり、而して腫瘍は漸時増大し又其數を増多せり、發病以來食思不振にして全身倦怠を覺へ又少しく羸瘦せり、便通は秘結す、

目下の主訴—身体各部淋巴腺の腫脹、

現在症—体格營養や、不良、皮膚一般に蒼白色、左頸部に大なる磊々たる多數の腫瘍あり、而して壓に對して僅に過敏又少しく波動あるもの、如し、其他諸部に腫瘍狀淋巴腺の多數腫大せるものを認む、然れども癒着、波動及壓痛等なし脾臟又僅に腫大を見る、檢血の結果、赤血球數、血色素量の減少を証明し、白血球は増數を認めず、……云々、其他の事項は尙取調中なれば、本患者は今日假性白血病と斷定するを未だ憚る所なりとて、次に患者並に本患者の血液染色標本を供覽せられたり、

▲第五席 二、三の「デモンストラチオン」

小原 講師

左の二題に就き述べられたり、

- 一、肝臟及肺の放線狀菌病標本
- 二、*Diphlococcus coryzae*, Hajek. の標本

今其大要を記載せんに、

●肝及肺放線狀菌病標本デモンストラチオン、此標本は病理教室貯藏標本につき本年六月偶然發見したるものに係はる、生前、明治二十九年十月二十八日金澤病院外科に入院、廿五才、男、鍛治職、縣下松任町の人、其年三月より右季肋部及上腹部に廣延性の膿竈あり、數次の切開を施したるも治癒に赴かず、遂に全身浮腫、腹水、黃疸を起し、衰弱により死亡の轉歸をとれり、全年十一月廿六日解剖の結果、肝膿瘍（右葉には主として大膿竈左葉及右葉に多數の小膿竈）ありて肝は横隔膜、前腹壁及大網膜と癒着し且つ多量の腹水あり、左肺斷面につき多數の帽針頭大一豌豆大の白色小結節あり、之を切開するに帶黃灰白色粘稠液を有す、右肺肋膜面に左肺斷面と全性狀の隆起多數散在す、腎には實質脂肪變性ありたるものにして、此諸内臟は其儘貯藏せられぬ、故に生前に於て、また剖檢上にも放線狀菌病の診斷は下されざりしが、本年予は他の目的にて鏡檢を施行したる所、其肝膿瘍及肺の結節は放線狀菌病によるものなるを確め得たるなり、（鏡的標本、Ⅱ肝膿瘍部……………竈内數箇のアクチノミーツェス、ドルーゼを見る、Ⅲ肺……………所々にドルーゼを有せる小竈あり、其他は一般に肺炎（加多兒性、纖維索性）の狀を呈す、又ドルーゼの稍々大なる血管腔内に

横り恰かもそれに嵌在、栓塞する如き像を呈する所あり、

Ⅱ種々の染色法を施せる放線狀菌標本。肉眼的肝、肺標本）次に放線狀菌病の侵入門戸より、肝及肺よつき其侵入経路を述べて、本例にては臨床上及解剖上、種々の点を綜合して考ふるゝ原發竈は腹壁の膿竈にして、それより肝に直接漫延を來し、横隔膜を経て右肋膜腔に入り、一方左肺には肺動脈による栓塞生成に因するものなるべしと推論せらるるなり、

●本年三月、一患者（急性鼻加多兒及氣管支加多兒）の微に淡紅色の硝子様、極めて粘稠なる喀痰及鼻汁を檢し、多數の「フレンケル」氏肺炎球菌に似たる重複球菌を認め、其形態、培養上の關係より一八八九年 Hajek 氏によりて記載せられたる *Diphlococcus coryzae* (*Micrococcus coryzae*-Hajek-Nigita) とすべしものなるを述べ、猶それと「フレンケル」氏肺炎球菌との差違、全菌と鼻加多兒との關係（本菌は從來の記載によるに唯一の原因にあらず、又動物試験にても非病原性なるが、また一部分は此菌によりて炎を増劇することあらん）に及ぼせり。「自抄」

▲第六席 現代醫學の要素 山 碕 教授

現代の醫家として世に立たんものは尠くとも一、二ヶ國の外國語を理解する事必要なるが、學生諸君にして動もすれば之の要素を忽諸にし他日醫學術研鑽の資料を欠く

ことなきかにつき深く誠められたり、殊に本校の規定にては醫科四ヶ年を通じ獨逸語の授業時數は實に七百時間に上り、之を他の諸學科時數に比較するに一も斯る多數なるものなきに係はらず、諸君の其割合に上達するもの尠きは遺憾とする所なりとて、さる年の卒業生にて目下軍隊生活を送れる某氏より全教授へ宛、寄せたる書狀中、在學中獨逸語修學を等閑に附したるを今に於て悔む旨、申來たれりとて全書狀を示されたり、

▲第七席 氣管枝に發生したる癌腫標本の供覽

村上 教授

初め鼻寒胃双球菌につき小原講師の演述に補足せらるゝに所あり、後、氣管枝に發生したる扁平上皮癌に就き述べらるゝも、此部の癌腫は稀有にして從來の報告も唯少數を見るに過ぎず、而して肺臟より續發し來ること、又此部に原發して肺の方に移轉することあり、該原發癌は被蓋上皮細胞より發生すべし、今供覽する標本は二十才、男、にて生前の症狀不明なるが、解剖上、兩肺結核にて著しき腔洞形成殊に左方に甚しく侵され居りしものにて、偶然に發見したるなり、左肺の肺門に近き氣管枝に結節狀となりて氣管枝内に隆起するは腫瘍にして、鏡下に氣管枝の被蓋上皮が深く粘膜下に入り込みて腫瘍に移り行けるを認め得、其他詳細に説明せられたり(肉眼的標本

|| 肺臟、一腫瘍斷面にて該氣管支腔に粘膜より隆起する結節を認め、氣管支周圍に結核侵襲淋巴の存する標本。
鏡的標本 || 十數種)

▲第八席 落漠たる晩秋暮れなんとす

通常會員 酒井謙治郎君

先づ伊庭想太郎氏の逝去を追想して悲觀的觀念を陳べ、又西行法師の言を引きて、師も猶秋に對して大悲觀を懷けり實に秋は吾人に浮世の無情を報するものなりと、一言一句、聽衆をしてぞろろ悲哀の情を喚起せしめたり、

▲第九席 興味ある肉腫患者の供覽

特別會員 横山 醫員

氏は外科クリニックにて經驗せし左脛骨上部肉腫及左尺骨の肉腫轉移一特發骨折、の一壯年婦人患者を供覽し、已往、現在病歴、診斷、兩部腫瘍の關係等詳細に述べらるゝ、猶委細は其後施したる手術の所見、腫瘍検査記事等に合せて次號「原著及嘗試欄」に掲載すべき筈なり、

▲第十席 「マラリヤ、アノフェレス」供覽

通常會員 内藤三太郎君

氏は本夏期休暇を利用し岐阜縣大垣町に於て「アノフェレス」に關し研究を試み、其際得たる蚊成虫、及各發育期の標本並に金澤に於て得たる全蚊成虫標本、クレーキス標本等多數を供覽し、麻刺利亞病、其傳搬蚊「アノ

フェーレス」の形態、等に就き委細演述せられたり、猶氏研究の業績は本號「原著及實驗」欄に掲載されたれば講演記事は茲に省きつ、

滿堂に轟き亘る拍手の聲と共に氏が壇を下られしは實に午後十時三十五分なりき、猶餘す所の講演者八名は次會に譲ることとして。
上田部長の閉會の辭ありて開散を告げぬ、

(文責記者にありよし生)

○本校庭球大會記事

(十月二十日)

越の狂球子

蒼穹の碧玉紅藍の錦繡と共に宏壯雄偉の氣を示し天籟地籟人籟の神人秘を合するは實に此快晴なるテニスデーとなす

此所紫錦台杏林のコートに北陸の驍將を集へて群集環視拍手の中に虚々實々一上一下平に入り仄に入る其變權奇化修羅の奮闘に至りては以下記載する所を參せよ

●一般競技(三回ゲーム)(午前九時開始)

- | | | | | |
|---|-----------|-----|-----------|-----|
| 1 | (多) 高橋房太郎 | 二一一 | (荒川) 田中嘉一 | 修藏 |
| 2 | (廣瀨) 竹次郎 | 一一二 | (加藤) 信作 | 今吉郎 |
| | (大橋) 太一郎 | | (豊田) 今吉郎 | |

15	(岡) 今井篤雄	二一一	(北) 高儀京二	兒
14	(赤) 祖父廉造	二一一	(濱) 服部鐵造	助
13	(清) 水憲作	二一一	(數) 見宗一	稔
12	(北) 村一清	二一一	(服) 部外之助	助
11	(吉) 川友信	一一二	(荒) 川修藏	良
10	(藤) 川三郎	二一〇	(村) 田秀三	平
9	(深) 谷藤市	一一二	(浦) 井肆郎	彌
8	(中) 田盈疇	〇一二	(真) 館修平	吾
7	(島) 多亮	二一一	(牧) 野新之丞	豊
6	(安) 津最澄	一一二	(片) 山善次郎	
5	(松) 生文雄	二一一	(新) 谷成三郎	翁
4	(辻) 井禮太郎	二一〇	(宮) 地浩氣	郎
3	(楠) 田利一郎		(片) 岡正彦	雄

16 ●● 數見宗一郎 一 一 二 ●● 鴨脚光榮

17 ● 井口爲四郎 一 一 二 ● 高保二

18 ● 新谷成三郎 一 一 二 ● 吉川友信

19 ● 武者素行 一 一 二 ● 三野泰二郎

20 ● 堀田圭三 〇 一 二 ● 石坂直二郎

21 ● 鷹見義郎 二 一 一 ● 秋山八百藏

● 齊藤房治 一 一 二 ● 鴨脚光榮

● 來賓撰手競技(五回ゲーム)(午後一時半ヨリ)

業工(石田) 〇一三 (北村)

石田組初め切先き鋭く屢北村組を惱ませしもミスのみ多く終にスコングにて哀れ戦場の露と消ぬ

農(青野) 一 一 三 小(森)

青野氏能く敵の虚を衝き壓迫せしも森氏亦能く應戦し前衛早崎氏のスマツシグ時々功を奏し桂冠は小松方に歸せり

中一(石川) 〇一三 (橋本)

好個の取組如何あらんと豫期せしも甲斐なく一中方少しも振はず橋本氏能く前衛を輔け赤祖父氏の犍猛なるスマツシグ美事の中石川組スコングの敗たるは呆氣なかり

師(木谷) 三 一 二 (清水)

敵は師範の副將我は新撰手清水組初陣の功名せずば末代の名折れ南無八幡大菩薩哀見給へとプレーの下に互に鎗を削りしが敵もさるもの後衛木谷氏の悪球はあたら若木の花を散らして清水組の敗

業(松坂) 〇一三 (北村)

松田組初めより振はず北村組の巧妙なるプレツシグにスコングとなる

中(松本) 三 一 〇 (副谷)

松本組立つ小兵とは云へ初陣先づ副田組を壓迫し堀氏のスマツシグ松本氏のモーション奇功を奏し副田組をしてスコングの醜態を演ぜしめぬ

高(前田) 三 一 〇 (今井)

前田氏の堅實なる熱球は時々小林氏を惱まし久田氏亦スマツシグにて功を奏し今井氏の打込不幸功なく小林組

零敗となる

師(熊木) 三一二 (服部) 野

敵は師範の御大將日頃鍛ゆし手腕は今日と仁王立の武者ぶり中々に雄々しく三野組好敵御參なれイデ辛き目見せんと初回一點を得て意氣頓に揚るされど敵もさるものいかで屈辱を甘受せん今こそ思知らさんと突撃防禦努むる程にゲームトゥールとなり兩軍の怒氣更に満面に現はれ觀者亦片唾を飲みしが三野組遂に利あらずして僅か一點の差を以て敵名をなさしめしは口惜しかりき

四(富田) 一一三 小(馬島) 倉谷

我副將先きに松任農學校青野組を斃す馬島組亦芽出度凱歌を奏せんと待つ程に富田組立つ馬島氏は小松中學のオーソリチーとして後衛の剛者富田組も流石其ブレッツシングに苦められ四高方乱陣となりミス多くて敗北す

七(波佐谷) 〇一三 小(小暮) 儀

波佐谷組毫も振はずミス多く小暮氏ロビングの得意背て京坂に敵を惱ませる腕の益々熟し波佐多組利あらずして退く

一(渡邊) 三一一 二(吉川) 中山

渡邊組は此度副將の位置を占めたる新銳の若殿原吉川組亦二中の御大將互に挑み戦ふ中渡邊氏能く虚を衝き其確實なる猛球は常に吉川氏を壓迫し吉川組遂に敗る此戦両前衛のモーション全く幼稚なりき

四(中川) 三一一 (辻) 野 田

中川氏は四高の大將稻本氏の後衛神野氏は此回加はりし新撰手辻組又一中の御大將にて牛耳取るもの中々の顔觸れなり初め辻組天晴敵を破りて一点を得次で中川氏のジツヘルな熱球に神野氏得意のバックの打込着々功を奏して中川組の勝

四(秋山) 一一三 (岡) 北村(仲)

遠からん者は音にも聞け近くば寄つて目にも見よ吾は四高に其名を得たる斯界の副將佐藤組なり美事魁首を切らさんば武士の紅葉と共に散りなましと意氣頗る軒昂す我は精進の副將岡組なり譬ば飛龍の躍て雲をなし猛虎の嘯きて氣を吐くに似たりけむ急霰の拍手に迎へられプレーの聲に戦は初まりぬ飛球熱球交々迸りて龍虎の球を争ふが如く援聲湧きて歡呼の音と空高く消に行きては木靈に返り雄々し共雄々しかりしが壹戦岡組脆くして破れ二戦岡組敵の驕を衝き秋山氏獨得のバックも更に功なく北村

氏の抜く所となり輕快と稱せられたるテットプレーも佐藤氏のジツヘルと共に施す術なく北村氏の逆モーションを加へて岡組更に勢を加ふ四戰佐藤組又スコングに破れ一對三を以て月桂冠は芽出度岡組の有に歸す、此戰當日の最も優秀なるもの吾人幾度か手に汗し嘆歡交々發し興極まりなかりき佐藤組の前後両衛共に理想と目せられ岡組の拔疑暗の念に驅らるゝ折から空しく戰場に露化せる佐藤組を痛みて岡組が益甲の緒をしめん事を望むや切なり

(三) 野

〇一三

(金) 子
武者

三野組零敗して金子組の勝

(附言) 姓名の上に●印あるは本校受験生

.....○.....卒業生

(四高) 第四高等學校

(一中) 石川縣立金澤第一中學校

(二中) 石川縣立金澤第二中學校

(師範) 石川縣立師範學校

(工業) 石川縣立工業學校

(商業) 石川縣立商業學校

(七尾) 石川縣立七尾中學校

(小松) 石川縣立小松中學校

(農學) 石川縣立農學校

隆盛なる當部大會も茲に終りを告げ當會部長の來賓撰手諸君及び一般出技者に對する一應の挨拶あり次で茶菓の饗應に移り快談時を過して五時散會す終りに當部會員諸君に一言す

余は熱誠なる元氣と旺盛なる氣力により本會が日々進歩の域に向ひつゝあるを喜ぶものなり

然れ共見よ由來北陸の地陰雲に鎖されて地の利を得るにかたく慄慄活達の雄志と雖も往々沈靜懦弱に傾き易し幾重の蟄々たる陋路を距て、都市と遠るは又常に井底の痴蛙たるを免れず、報ずるものあり傳へて云ふ京坂の風雲益々急にして中原の鹿未だ定まらずと養馬練兵取糧磨劍皆是れ該下倥傯の急務にして徒に上臈の朱欄によりて春月に浮れなば征矢たばさみて秋風に面するの時を如何せん

本部會員諸君夫れ努力せよ!!



○弓術部報告 一 委員

▲金澤第一中學校對本校

弓術紅白勝負記事

曩日四高校を骨破微塵に擊破して彼を後へに撞着せしめたる第一中校は爾來彼が自負心益々呑牛の如く遂に吾に檄を飛ばして戰を挑めり、時やよし、などて我校の健夫豈茫然睡夢を貪らむや忽ち轟く檄羽一報、颯然立てる自校の強士、合戰は愈々十一月二日と定りぬ。

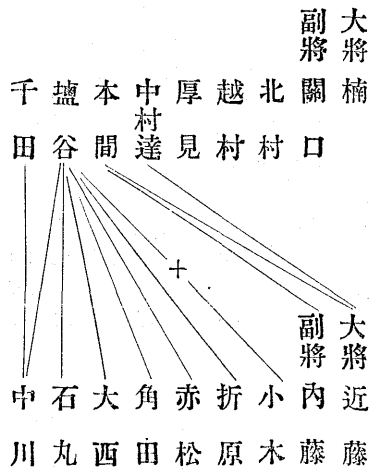
健兒が待ちに待ちたる當日は練腕の間に至りぬ、天は晴れ氣は朗に、あつばれ奮戰の氣はいは實に的場の周邊を襲吞せり、午下時鐘一点、絃音高く響いて愈々戰は開かれたり名に負ふ各自々校の譏譽を双肩に擔ふ勇士、特けて滿身の勇を矢先に罩めたる弓勢なれば、ヒューと切つて放つ一矢も、空に響きて飛鳥も影を潜めん計り愈々出て、益々激闘、寂漠破れて荒ぶる阿修羅、花と散り雪と消れて優劣は今遽に定かならず、さる程に茲に敵にして鹽谷と名乗る、小兵なれとも引き放つ矢は養由が秘術なけれど三に二つは誤り無き矢筋の剛の者、彼が銳鋒は早や我將士六騎を擊倒せり、何條無念殘念を奮躍一番蹴つて起りし味方の憤士、小木秀時は衆目の重望を一身に

負ひて彼と健闘數時互に秘術を擧げて鎬を削りしが敵も、さるもの遂に輸贏を決するに暇あらず壯然刺し違へて倒れたり俄然時運一轉味方は茲に至りて一大頓挫を來せり敵は未だ殘す所七健士然かも達腕、健肘自ら任ずるの士を以て控へたり味方は余す所僅に二騎、必射必戮の棘腕は世の評定する處とはいへ惡戰數刻、獅子奮盡の激努を以て迫りしも寡以て能く衆を制するを得ず遂に彼等が面前に弓を折つて遺憾なる哉、敗の止むなき運命に陥りぬ、時將に暮色蒼然。

嗚呼惟れば一贏一輸は時の運、輪還は世の習ひ、勝敗は其の時にあり、知らず、時めく時のなからめや。

番 組

紅 軍(第一中) 白 軍(本校)



り、先づ我れこそはと現れし丸山を討ち倒し續いて來る和田、關根をも見事一氣に打亡ぼしたる其の手練の程、打ち勝つて予見にける次に現れたる白軍の二勇士小林、中川久は敵の諸將宮村、浦、近藤益を打落したれば彼れ紅軍は稍色めきぬ、玆に、さるもの有りと聞けし紅軍の荒武者、姓は金子、名は義長奮然起つて引き絞る剛弓は敵に、した、か痛手を負はせて中川久、吉井、茨木の面々は脆くも彼が矢先に參つたり、宮城と名乗るは紅軍の一將、日下と呼ぶは白軍の一士、何れ劣らぬ勇將互に鏑を削りて戦ひしが日下の矢や強かりけん射倒されたるは遺憾なり、さらば恨をと云ひさま味方の恥辱を晴さむと勇み立つたる小幡が、ヒ。ーと放ちし矢は過たず日下を殺して、續く延川をも一矢も果さんづ勢、あはやと見る間に憐にも刺し違へて相退きぬ於是紅軍は吉川白軍は奥山、新手代つて、立ち現る、や宙に響いてヒ。ーと放ちし白軍の強矢はヒシと敵心を制して輕くも吉川は破れたり、我れころはと満身に勇を込め、いざと討ち當りし田島も亦脆くも、やられたり、哀れ無念と弓も撓まむ計り養由が秘術なけれど大磐石の如き剛の者、吾れこそ射て仕らむと、筋金入りの鐵腕に強弓揚げ躍り出でしは其名も聞けし中川參謀、待て目に見せ呉れんと激戦木魂に響く矢叫の聲、敵もさる者、承つたりと暫く挑みしが紅軍

の武運や拙かりけん彼が銳鋒に避易し遂に破れて中川の落されたる予是非もなき、遮莫今や紅軍は數將の斃る處、參謀亦已に頸を、かゝれて旗色盛ならず、さる程に愈々紅軍にては副將赤松の出御と見られたり先づ弓勢の程御覽せよと、現れし河合を撃倒し續いて起る石丸も矢先にかぶりて相果てたり時運一轉今乎脆くも白軍は早や二勇士を損して愈々參謀角田の出陣と定れり名にし負ふ手に覺えある荒手なれば彼も秘奥を極めて應戰激闘、息を殺して觀士も視窺せり輸贏は時の運なれば是非もなし、あたら抱負満々たる白軍の參謀も術已に盡き今は弓を挫きて無念にも彼の面前に倒れたり事玆に至りて今や大將の對陣たり紅は小木、白は内藤、是々當日の關が原、兩軍が勝敗の岐る、處、全軍齊しく鳴を静め息を殺して凝視せり何れ名にし負ふ勇將、各手練の秘術を盡し一上一下電光石火一矢的中すれば歡聲天に轟く實にや兩虎深山に挑むとき鏗然として風起り雙龍青潭に入る時沛然として雲起るも斯く予あるべき絃音、かけ聲勇ましく戦今や酣なる、忽ち見る白軍の陣頭に關の聲起つて勝は白將の方に歸して差一本と記されたり時に微雨は近き以前より至り恰も天は今日の戰場に、あたら勇士の骨を晒せしを悲しむが如く冷風は白軍の榮を四方に傳ふるに似たり時正に三時、戦闘は以て終りを告げぬ、勝敗は時の

運、勝者、敗者共に雄々しく見られたり

紅軍 白軍

大將 小松 大將 内藤

副將 赤松 副將

參謀 中川善 參謀 角田

田島 石丸

吉川六 河合

小幡 奥山

宮城 延川

金子 日下

近藤 茨木

浦村 吉井

關根 中川久

和田 小林

丸山 成田

宮澤 西村

酒井 須賀

春山 富永

安場 柴野

中原 磯田

◎は三人抜き優待として賞を受けし勇士。

終りて五寸並三寸的競射は余興として舉行せられたり
小幡が切つて放ちし矢は見事五寸的に射中して名譽の賞
は彼の頭上に落ちぬ

○四年の級會 (十二月十五日曜)

朦朧派の作品に見るやうな、神秘深い夜の景色に、初
雪の金澤は凍りついて、十万の夢の、結ばれたと思ふ頃。

商業會議所の大時計が十時を打つて小半時も過ぎた時
分、吐かれて出でた百に近い人數、車の響き靴音下駄音
の、暫しは敷石に打ち乱れて、冷たい固まつた夜の空氣
を破つたが、さらばと互に西と東、濃く淡く地上に落つ
る影も消へると、夜を守り貌の電燈ばかり、ちらつく小
雪を照らして居た。

これ敢て羽二重の評議でない、九谷燒の寄合でない、對
清貿易の前途でない、虛無黨の密集でない。

二

天の河原の逢ふ瀬に似たる、一歳に二たびの集會は、
その凄まじく、みぞれ降る夜に楽しく終つた、窓外に狂
ふ風の騒がしきも爐邊の快談を奪ふことなく、煙草の煙
は棚引いて、參ずる人は多かつた。

三

たばしる霞の拍手の音に、酒井君は壇に上つて、級會が過去の歷程より絶えず成功したこと、佐々木級長の指導のもとに、吾等はこよなき幸福を感じて居ることなどを、開會の辭として、几帳面にうろして滑稽に演ずると、代り合ひまして虎丸の講釋ことやこまかに申すにも及ぶまい。

四

大坂方の強者が荒らし回つた演壇に、佐々木教授の姿が現はれた。

常に聽く滔々懸河の辨を、いかに今宵の吾々が待ち設けたらうか？それあらむが爲めに、雪を犯して風に惱んで來たもの、誰か荒唐無稽の夢物語りに比べやうやう、大坂方の豪傑は我等の頭を壊亂した、然したゞ呵々大笑せしむるのみで、本幕前のだんまりに過ぎぬ、級會の必要と手段利益よりも、吾等は底知れぬ快辨の泉から、そが一滴を望んだのであつた。

五

耳傾けて諸君は、魅せられたやうに、調うるわしく氣品向き、西の國ぶりの思想を追ふた。

演者はたれぞ哲一伊藤君！誦するは日英同盟の歌！！
君の翻譯にてその意を覺つた自分は、たゞ一陣暗の夜

に面を掠めた梅が香の名殘か、心に一時は泌みわたりながら、それや靈弦のから鳴りに、響は胸に通つたが、今茲に再び説くことの、詩美を傷めるかを恐れて演者に紹介の勞を頼むのである。

あゝ詩の意味は文字の外に、句と句の間に、平風なる物象の上、普通なる人事の面に、深く七情を動かし、鋭く心を刺して、現實を離れ、全く太一と合体したる吾等が魂を、遠く空の彼方に誘ひ去らしむるのである。

藝術の至高いたかきものよ。

洋々四千歳の昔、詩歌のグリースは榮へてそして滅んだ、然し詩歌は滅びない。

生存の戰場に建つ武夫に詩歌は。糧かてを與へない、矛とも楯ともならぬではないか。

詩歌は外冠を防ぐを得るか、内治を助くるを得るか、富國強兵の基礎たるを得るか、學問には證左あり、焉、空に向つて煙を吹く形あつて實なきの藝術よ……………。

友は肩を打つて論ぜんとした。

あゝ友よ、舟は水を行くべく作られてある、たれか岡に上つて走れと云ふや。

六

讀むたびに自分は常に感ずるのだ。
詩歌の形式は詩人の感想を鑄鑄する鑄型に外ならぬ、

然り詩人は韻脚仄を有する鑄型を用ひて、縹緲幽玄の思想を發表するものである。

若し内容たる思想觀念にして、幼稚陳套平凡の嫌あらば、形式の如何に精巧に、如何に婉麗であつても、それは唯一塊の坭土に等しくて、一顧の價値もなからうと。

であれば、その内容さへ清新に奇抜に玄妙深邃ならば、吾々は喜んで之を迎ふるのである、さもあらばあれ、形式と雖も輕視するのは愚で、韻律を有する詩歌の形式は、臆て散文との劃線をなすもの、ミウヂカル、メロテアスの快感を催し來つて、屢暗誦記憶を助くるものである。

七

深く考證する暇が無いけれど……

泰西の文學に徴しても或時代には形式を渴仰し、鍛鍊砌磋、ほとんど微瑕をも止めざるまでに拵發したが、想到於ては見るべきものが少かつた、或る時代には想を過重して形式は破壊せられた、沙翁の戯曲其の他の抒情詩の眞價は即ち内容にある、聞くゲーテの詩篇の如きは想と形と共に完備すると云ふが、彼が晩年に於て何故に思索の方面に力を用うること多からざりしかの嘆きがある、所詮詩歌の第一義は形式で無い。

八

何を以て之を述べ來たつか？

由來日本の國詩とは何？三十一字詩か十七字詩か今論ずる限りでは無い、然し新らしき詩型起らんとするの機運は、髓に今は昨より一步の前にある、彼の新体詩が此の要求を満たすか、これも疑問と云ふべきである、然らば日本現在の詩歌の眞價から探求せなければならぬ。

九

日英同盟の歌一不幸にして自分は作者を知らぬ一然し詩材として甚だ清新に甚だ雄大に時代の産物を捕捉したもので無いか、花鳥風月、乃至漢詩的嘆世愁哀の狭き範圍からは殆んどポエチカルテーストを見出すことが出来ない位である、泰西の詩人はどう云ふ觀察の眞髓を有して居るのか、ハンマーの音それが美しい詩となり、エンデンの響きそれが詩となるのである。

取材の自由なる、詩化の巧なる、これ正に日本詩が學ぶべき刻下の急務である。

あゝ筆が外れてきた、いざ立ち返り再び爐談の温き景を描かうか？、

十

ナザニエル、ホーソルレ(一八〇四—一八六四)は米國有名の小説家、その著ワンダーブック、スカーレットレットターは讀書界に嘖々の名聲を博して居る、所謂心理小説のハ人心の秘を映し、情緒言動の客觀的記述よりも尙ほ

一段根原に遡つてその動機たる心的現象を描出する所の
 神と稱せられて居る、その夜池部氏がゴールデンタ
 ヲは實にワンダーブックの一章である。

要は黄金崇拜の愚を指摘すべく希臘の古譚より材をと
 つて極端なる拜金帝王をヒーローとし、黄金ならざれば
 觸るゝ事さへせぬとの願から、觸るゝ物悉く燦然たる黄
 金となる仙術を得、喜び禁せず、あらゆる物を黄金に化
 し、我が望み足れりとして居つたが、計らざりき、この
 有難き金化の偉力は、たゞや一人の愛娘を黄金像にして
 しまつた、此に於て彼れ初めて迷夢より醒め來り、世界
 に黄金より幾何尊く幾何高きものある事を自覺したと云
 ふのである。

著者は彼國少年子弟に興味ある方面より一針の教訓を
 與へたものである、黄金たれか欲せざらん、しかも黄金の
 光に眼くらみ、理性の没却せらるゝは現世が傾きつゝあ
 る思潮ではなからうか。

人間の弱点は同情すべきものであるが、弱点か齎す罪
 惡は既に良心によつて批判矯正せられんければならぬ、
 吾々は之を惡まんければならぬ。

著者の筆には此同情も罪惡觀が明かに寫されてある。
 やさしき大和撫子が袖をぬらさじと泣いた降るアメリ
 カばかり拜金の餘弊を戒む可きで無い、武士は食はねど

高揚子の日本が、骨逞ましき諺を殘骸にして、黄金の魔
 風は世人の腸に泌み込んだ。

十一

黄金に節を變ずるの政客は、寧ろ三面瑣談の主人公よ
 りも重からぬ世である、親子の情も兄弟の誼も朋友の交
 も、殺人も竊盜も自刃も身賣りも、うきよ叢誌のくさく
 は金にゑにしを有つて居る、黄金のための學問、黄金と
 の結婚には既又讞で、黄金とは山より出づる一種の金屬
 にしてよく屬性と延性とを有すなどぞ安心しては居られ
 ぬ次第。

十二

然かしゴールデンタツチの一篇は我國人心に剗切なる
 教訓であるが、之を文學の側より見ても興趣と美感とに
 打たるゝのである。

桃太郎、かちく山、グリム、ハウフ、アンデルゼン、
 エンツが世界幾億の少年を喜ばせたやうに、此は道義的
 觀念と理想觀念を讀者に與ふるを信ずる、ウオーズワ
 ースが云ふた如く少年は大人の父であればメルヘン、フ
 ーベルの少年文學は垂髫の玩具では無い、實に國民未
 來の父たるものゝ文學である。

ルソーがエミールの教育を論づるに當り秋毫その父
 母に説き及ばずあらゆる教育上の勢力を以て教育者に一

Kanazawa Kanazawa
Rita Rita Toyokichi

任した如き(よし謬見たるにもせよ)或はベスタロッチェの訓化と教授とは必ず家母の手に於てなざるべきものなりと論じた如き、何れの場合にせよ、自分は觸金術の如きを推す、一は家庭の趣味を高むる上に、一は健全なる國民性を發揮する上に於て。

* * * * *

寫聲機は高らかに歌ひ出した、大絃小絃三味喇叭、雪も降つて居やう、風も荒さんて居たらうが、硝子戸一枚の此方は喝采拍手に賑はしく茗を喫し甘を食ふて長夜の宴を張れるかと、道行く人の脚を留めた。

十三

今宵吹雪の寒さに筆持つ手の堪え難い、これは粗笨な會報記、微恙ありとて來なかつた君の座右に呈する、

(十二月三十日 雨橋生)

○ 解 剖 祭

第十九回解剖祭は去歲十一月三十日午後一時より石坂五十人町瑞泉寺にて行はれたり讀經、職員生徒遺族一同の焼香あり後、井上歌師の死者の追吊につきて説教あり、この日初めて飛霰強風。句あり焉

凧や鐘樓にうなる物の精

○ 柔道、劍道部寒稽古開始

木枯吹き荒ぶ初冬、時折りは北國名物の霰が飛んでくる、暖爐も火鉢も親しくなつた頃日、扣場には、寒稽古開始、十二月六日より、午後五時から……云々の掲示が出た。血湧き肉躍る幾百の健兒、何條黙すべき。大手町本校の濟々堂には、エーヤの掛聲と丁々の音、いっと盛んなり。

○ 新年拜賀式

元旦午前九時より講堂にて拜賀式は舉行せられぬ、職員、生徒一同、謹んで御眞影を拜し奉り、生徒總代は新年の祝辭を述べ、校長また職員を代表して祝辭あり、終りて陛下の萬歳を三唱して撤式。

○ 特別會員左記の諸氏より本會へ年賀狀を送らる

- | | | | |
|--------|---------|-----|---------|
| 在紐育 | 松原 三郎君 | 在獨乙 | 松久 祐馬君 |
| 在倫敦 | 山口 辰五郎君 | | 鈴木 寛之助君 |
| | 尾倉 一英君 | | 濱地 藤太郎君 |
| | 岩崎 勝 治君 | | 松 尾 等君 |
| | 橘 左 内君 | | 安田 三木君 |
| | 須貝 猪 次君 | | 丸山 六郎君 |
| | 村尾 左内君 | | 金子 太須計君 |
| | 杉田 治十郎君 | | 植木 信親君 |
| 北 豊 吉君 | | | 林 可 一君 |

芦澤 照君
 勝股 享君
 戶谷 慈一君
 藤浪 謙君
 清水 秀夫君
 平田 一若君
 中村 惠君
 渡邊 十治君
 政山 龍雄君
 森田 齊次君
 原田 悅五郎君
 大橋 豐君
 眞澤 貞一君
 小出 貞次郎君
 小椋 正香君
 松村 魁君
 溝口 龍三君
 千田 常外君
 中村 弘齊君
 中島 正泰君
 石田 五佐君
 岡島 敬治君

原田 正廣君
 藤井 榮四郎君
 仙場 松齊君
 額 又太郎君
 星野 正齊君
 朝倉 重敏君
 平原 雲新君
 綾部 讓君
 西 正胤君
 松江 鐵五郎君
 井上 只次君
 太田 長作君
 都築 熊藏君
 赤倉 喜久雄君
 小黒 仁太郎君
 高松 岩吉君
 山田 義忠君
 草野 佐一郎君
 桑折 直君
 島田 吉三郎君
 諸角 友平君
 坂本 信一君

宮井 勇君
 城石 健治君
 長村 吉太郎君
 田中 義雄君
 水上 俊三君
 松王 數男君
 松井 梅次郎君
 八木 德太郎君
 谷口 長松君
 中西 島吉君
 青山 寬之君
 中谷 正範君
 來間 隆次君
 笹田 順三君
 松浦 龜太郎君
 榑原 久君
 土田 久三郎君
 飯塚 忠男君
 曾根 章君
 窪美 一久君
 野村 亮吉君
 太田 他計作君

田村 圓四郎君
 永井 學造君
 山本 幹雄君
 生沼 曹六君
 村尾 純昌君
 河野 勇君
 河崎 有作君
 岡田 虎介君
 山本 幸吉君
 吉川 砥直君
 熊西 中藏君
 木谷 義太郎君
 谷中 正勝君
 菊地 文岱君
 太田 精一君
 木下 克雄君
 尾崎 平吉君
 小田 利吉君
 龍田 恭富君
 河合 忠治君
 安積 新君
 林 京次郎君

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|-------|--------|-------|--------|--------|---------|--------|-------|------|-------|-------|--------|-------|-------|--------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|
| 池田敬一君 | 春日望君 | 福島可鋪君 | 平澤嘉圓君 | 大澤賢吉君 | 武田久米三君 | 佐々木純一郎君 | 須藤庄太郎君 | 北川光雄君 | 伴鐸也君 | 伊藤昌平君 | 田邊傳六君 | 羽根田信次君 | 木下節三君 | 國分金城君 | 近藤琢磨君 | 河野益躬君 | 彦坂誠一君 | 臼井順太郎君 | 崎達郎君 | 柴原外男君 | 松山清君 |
| 兒島亮吉君 | 杉山政長君 | 種子田秀吉君 | 近藤勇記君 | 上阪政太郎君 | 深瀬信之君 | 吉村一馬君 | 村本淳吉君 | 本田三郎君 | 辻岡律君 | 中條俊夫君 | 中川喜平君 | 吉住保君 | 松田研吉君 | 竹松衛君 | 本城熊二郎君 | 輕部修一君 | 長井運男君 | 富田寬君 | 島村伊三助君 | 下條正夫君 | 百谷義一君 |

步兵第卅五聯隊見習醫官諸君

- 林正雄君
山内兔毛君
岡田甚英君

(外太郎事)

- 喜多養元君
大西瀨治君
鈴木實君
阿部時雄君
吉田幡誠君
千葉茂君

右之外名譽會員鈴木文太郎先生より賀狀を寄せられたり



- 杉部多米吉君
山下銀吾君
中野才幸君
谷澤一郎君
駒井定哉君
庄司正義君
石橋四郎君
酒井利勝君
高松多齊君
齊藤義雄君
蓮村外男君

通信

○松原三郎氏通信

此一篇は昨年九月八日發、十月五日到着せし私信なり、書中余か希望を容れ現在及將來に於ける氏が一身上の眞情を披瀝せられたる處妙からざりしも、廣く吹聴する勿れとありしを以て、打返し氏が知友、先輩中切に其實相を聞かんと欲する士多かるべきを思ひ、差支なき範圍に於て之を公にせん事を強請せしに頃日一身上に關する事項を除くの外投載せらるゝも差支なしとの報あり、今則ち其旨に従ひ一部削除の上之を掲ぐる事とせり、見ん人冀くは之を諒とし相俱に氏か深き厚情に對して酬ゆる處あらん事を望む (戊申正月十日 八田生識)

貴下が重症に罹られ久しく業を廢せられたる事を知りて大に驚き候、御病症は何なりとも御輕快なされ候上は左迄深く彼是穿索する必要もなし兎に角自愛が誰にも必要と存候、飯森氏も御歸朝の由益御研究の事と存じ大慶の至りに候、何でも開業醫の方がドシ／＼歐行せられて向ふの醫者も横町の醫者も夫々洋行の金箔附と云ふ工合にならん事を祈る、勿論洋行してもせんでも別に差異を附けない様に日本の醫學と俗人とが進歩すんば其に超した

る事はなし、ドチラニシテモ洋行歸りが持てる様にては駄目なり

病餘の軀を驅つて富士登山の希望ありとは壯舉なり、併し壯舉と暴舉とを混同せられざる様吳々も御注告申上候御互に有望か不有望かソナ事は知らないが兎に角今少し生きる丈の見込ある男共なれば各自よ自愛して商賈大事に勉學するのが御互の爲め又六ヶ敷云へば社會の爲め一層之をかければ學問の爲め(ドーダカ!)と云もの、コソナ事は佛に説法と云ふ寸法だけれども醫者の不養生と云ふ事もあるから一寸筆の序に!

貴下の御手紙と全時に松扉君から登山スタンプある端書が富士山頂より來れり、大事の日附が無いので何日だか分らない、コレハ日本人の手紙の欠點なり、序に日本から來る手紙等の裏に差出人の名を書くのも當地では變なり、日附、封等も變なり、又米國へ來る手紙の表へ日本字で並び書きするのは勿論無用で生憎當地では「松原三郎様在紐育……等」讀むことの出來る博學の郵便配達夫はなし、最も異様に感するのは日本から來る手紙の宛名が封筒又は端書の上の方へハリ上ゲテ書き初めることである、日本人同志では丁寧の様に思はるけれども當地にては違法なり、當地にては宛名を場面の半ば以下に書き以上の部分をは郵便局消印用に供する事となり居り候

尤も日本の郵便局では何處でも無暗に消印を押し居るけれども當地では器械で迅速に印する故一定の場所即ち半ば以上の場所を要す、日本や獨乙の郵便消印は百通中に日附等が明瞭に分るもの二三通なれども米國の消印は百通が百通とも明瞭に分る様に器械で捺印すること何時も御入手の端書で御分りの事と存候、別に灰殻があるのでありませぬが例の郷に入りては郷に従ふと云ふ事があるから一寸序に記したり、又醫士なれば Dr. S. Matsubara にて澤山なり其を Mr. Dr. とか獨乙風に山鳥の尾的にヤラレタ手紙を時々入手する時には持つて來た小使にまで工合悪しく感せられるに付米國及英國行の手紙は注意すべき様に御知己へ御話ありたし、米國は万事單簡明瞭平民主義にて Prof. にも Prof. と書かず矢張醫士なれば Dr. と書き醫士を Prof. と呼べは日本で「先生ドーダイ」と云ふ様に半ば滑稽的にヒヤカス意味あり、夫故當地にては獨乙の様に Prof. Dr. と云ふ様な肩書は無し

華嚴瀧へ投身する者が藤村操以來續出するとの事にて統計表を御惠與に相成り拜續仕候、別に罵る程の事でも無く亦譽める程の事でも無く従ふて強て止める程の價值も無く亦勸める程の價值も無く島國の哲學(と云へるかドーダか)の然らしむる自然の勢と存じられ候、兎に角日

本人は物毎に實行するよりも理屈を考へる方の人間にて其爲め日本の外交など常に失敗に失敗を重ね居り候次第なり、日本人は主として理論、名目、体裁に重きを置きて實際、實行を二段にする惡風あり、小さき高の知れた朝鮮に手古摺つて他國の機嫌等を伺ひつゝ思切つた事をヤレナイのも此筆法から來て居るなり

金澤病院が轉宅以來御客が少なくなつたとか云ふ話ですが別に悲むべき程の事にあらずと存候、一体官立病院が私費患者を取扱ふと云ふのが餘程變に感ぜられ申候、當米國にては私費患者は私立病院へ行き官立病院は單に治療するのみに御座候、又各公私立には澤山の Ambulances がありて途中にて負傷者又は急病者を生じたる時は巡查等が電話にて最寄の公私立病院へ報知し數分時間内に醫士及看護婦が馬車で飛んで來る事の恰も消防夫が火災信號によりて飛び出すと全様なり、コンナ事は日本でも最早出來そうなものと存候、又當地にては普通者又は發狂者にては悉く且つ直に治療入院が出來る様になりて居り願書を出して待つて居ると云ふ様な呑氣なことは無之候、學問等の理屈はサテ措き實際に患者治療組織の完全せる事は米國紐育が世界第一に御座候、此點に於ても亦當地の勞働者は世界中で最も幸福なりと確信せられ申候、殊に精神病の方では紐育州のみにて州立精神病院十

三ヶ所、犯罪精神病院（犯罪當時精神病患者なりし者）一ヶ所、精神病院犯罪院（犯罪時健康にして入監後發狂せる者）一ヶ所、中央精神病院研究所（小生の蟄居する所）一ヶ所ありて總患者二万八千人餘を施療し其他に二十三四の私立精神病院ありて金ある衆生を濟度しつゝあり、紐育州廳内には他の各州と同じく特別に精神病課を置き他の教育課と並立せしめ毎年千三百万圓以上を支出しつゝあること即ち其實行は世界第一に御座候、此他に州立癲癩院、結核院、白痴院、感化院等あり、此夏旅行せし Massachusetts 州に於てさへ急性精神病院五、慢性精神病院三、酒精中毒病院一、犯罪精神病院一、癲癩院一、白痴院一、結核院一、私立精神病院二十あり、米國全体にて公私立精神病院三百七十八ヶ所（公立二二六、私立一〇二）ありて十五万人以上の患者を收容す、米國は大なれども其人口は日本の三倍迄もないであるから此割合にて云ふと日本でも百以上の精神病院があつて五万以上の患者を收容せなければならぬ割合なり、コンナ事を思出すと日本が世界の一等國の仲間入をするのも前途尙遠達と思はれる

小生も母が病氣の爲め此夏に歸國すると云ふ噂が専ら盛であつた相ですがサモあるへき事と思はれます、自分一個人のみの事を考へたならば亞米利加永住は最上の策で

あらうと考へられますが、小生一人のみを一切の生命として生きて居る母の事を思出すと感情上ソナナ事をヤル譯にも行かない、物質的文明の整頓せること生活方法の割合に完全なること各階級が平民主義なること各個人が同等權利で大統領も勞働者も法律上例へば投票上全一の權利を有すること即ち一口にて云へば社會組織が小生の理想に近き事が大に小生の氣に入り須らく男子が以て奮闘の舞臺となし且つ埋骨の地に擇ぶべき所と存しられ候、併し都の月もよいが初生聲を擧げた深山の月にも棄てられぬ風情があるからチー一概にも言へないが身、長男に生れなかつた果報者は須らく來つて此世界の活舞臺に奮闘し自由の空氣を吸ひて人生の眞意義を解すること男子の快心に非ずや、高の知れた華嚴の瀧壺へ身を捨つるよりも來りて世界第一の「ナイヤガラ」瀑布へ一層のこゝと舞込んだ方が尙壯舉にあらずや、來る年も來る年も不景氣と啣つ鳥國人間は憐なるものなり、數千年來相變らず幼稚極まる方法にて不生産的農業を國是とする多數の國民は須らく來りて此壯大なる原頭に立つべしである、親の脚を嚙りて耻辱たることを知らざる青年は須らく來りて此愉快なる舞臺に立ち自活獨立して勉學すべしである、月よ二十五圓を戴きて所得税を納めつゝある日本の月給取は須らく來りて世界の金穴に入るべし、下女にし

て尙且つ月三十圓以上をセシメつくあるに非ずや、郵便配達夫及巡査でも百五十圓以上三百圓位の月給で先づ日本なら陸軍大將位カネー(以下數十行畧)

近來各醫學學校に精神病學の講座を獨立せしめることになつた相ですが専門家を置かない以上はソナナ法律が出來ても無効たるべし、兎に角日本の素人は勿論の事普通の醫學者さへも精神病に向ては更に注意を拂ふて居ない、ナル程聞けば精神病者は等閑に附すべからざる者なること位は返答するだらうけれども胸内痛切に注意と感興とを拂ふて居ないのであるから日本國及醫學學校に精神病治療及教育制度の完全になるは前途餘程遠き事だらうと思はれる、新聞紙に依れば近來 *Teppia* に就て相變らす尙審議中だと云ふことだゴンナ事は審議よりも既に實行の時期であると思はれる、米國では片端から *Teppia* 患者を孤島に送り其處で種々患者を慰安且つ治療することになつて居る、日本でも小笠原島の様な所へ送つたらよい、ソコへ來ると日本の精神病院制度は未だ審議にも上つた事がないらしい、馬鹿げて話にならない、歐米の精神病院は東京巢鴨病院の少し規模の大きい位のものゝ様に思つて居る人が澤山あるだらう、小生もソナナ氣で來たが實際は豫想と全く違つて居る、患者數が巢鴨の十倍あつても建物は四五十倍あり敷地は百倍もあり四五哩四方

の廣大なる耕作地及牧場ありて牛肉及鶏卵の外一切の食物(野菜、菓物、豚肉、牛乳等)を自ら産出して二三千人乃至五千人に供給して居り牛二百頭、豚五百匹等と云ふ場合にて盛に患者を役使して種々の工場を設け大工部、鍛冶、鐵工、印刷、石鹼製造、洗濯、發電、製服、製靴等の規模の大なること、之を實見する時には其身病院内に在ることを忘れて何か夫々の會社を訪問するか如き氣持す、病院に用ゆる椅子、テーブル、ベット等を自ら製造し一切の書類、用紙、年報等(此用紙も)を自ら印刷し患者同志にて病室を建て或所では煉瓦まで焼きつくあり、夫故敷地廣大にして森あり畑あり池あり川あり山あり谷ありて無數の建物其間に散在し恰も一の町又は村の部落を形式し敷地内に病院専用の電氣鐵道ある病院あり、或は専用の涼車ありて牛乳、洗濯物等を敷地内の一點より他へ運搬しつゝあり、大抵の病院では各建物を參觀するに馬車を要し到底一々歩むこと能はず、病室も散在し、遠きは二哩も互に離れ従ふて一病院内に數多の醫員寄宿所ありて互に距離す、夫故金澤兵營よりも幾倍大なる敷地を有し之を實見せざる人には恰も法螺であるが如く思はれる程にて東京の巢鴨病院とは丸切り其趣を異にして居る

日本の精神病院はドンナ風にしたら良きやと云ふに、小

生も少し材料を持つて居るけれども只今ソナ事を申上けても何の役にも立たない、只一言すれば日本全國に五六ヶ所乃至十二ヶ所位の大規模の精神病院を立てる各二千人以上を收容し二里四方位の原野を用ひて鐵道又は電鐵にて交通を便にし、成るなら醫學校より十里以内の所に置き且つ全國に一ヶ所の精神病醫を講習養成し總て國究所の如きもの)を置きて精神病醫を講習養成し總て國庫支辨たるべし、各府縣に小規模の狂院を設くるは大に不經濟なり、農業、牧畜、工業を盛にし悉く患者を使役して病院一切の需要を自ら供給が出来る仕組にせば割合に安くして完全なることをヤリ得べし、今の日本の狂院の如く小規模に止め患者をして服藥及食事の外に何事もなさしめざる様にては甚しく不經濟なるのみならず治療上にも宜しからず、又當地にては院長、醫員、看護婦、事務員、小使等に夫々完全なる官宅、寄宿舎を設け食事を官給し洗濯等も病院内にてヤリ、醫員等は結婚すると其家族迄も病院にて養ひ成るべく少人數を使ひて充分の俸給を與へ専心病院に永く従事せしむ、夫故當地にては醫員及院長等に私宅開業を許さず、看護婦月給三〇—七〇圓、看護婦長七〇—一〇〇圓、院長七千圓乃至一萬圓、醫員年千二百圓乃至五千圓、事務長三千圓乃至四千圓等の割合なり、日本に於けるが如く患者數に比して澤

山の醫者や看護婦殊に事務員を使ふて居る病院は當地には無し

此夏の旅行の様子は詳しく申上げれば限りがないが大體の事は其都度各地より申上げた端信の通りである、兎に角多くは電鐵のみを用ひ汽車よりも其旅行大に厄介なりし代りに趣味も亦無盡藏なりき、此度は精神病院十九、普通病院七、感化院七、監獄署六、盲啞學校一、大學四、醫學校四、研究所三を參觀し、其外に例の Portomouth (日露談判地)、Concord (米國獨立戰爭地)、Mt. Washington 及大文學者の住家等を見物し得る處甚た尠からず、丁度之にて紙も盡きたから擱筆する 左様ナラ

(今月より萬國郵稅改正せられ三〇、五迄十錢です)

* * * * *

因に松原氏に音信を通せんと欲する諸子は左宛にて認むるを要す

Dr. S. Matsubara

Pathological Institute

Ward's Island

New York City

America

又在獨敷波重治郎氏には昨秋 Würzburg より Leipzig に轉學せられ

(通信)

Herrn Prof. Dr. J. Shikhami,

Kramer str. 6H,

Leipzig.

Deutschland.

加藤寛氏には其後轉宿せられたり、即ち

Herrn Dr. K. Katow,

bei Frau Görblitz,

Dom str. 35.

Greifswald,

Deutschland.

にて發信すべく、尙吾人の大に歡送せざるべからざるは
今回眼科學研究の爲め在富山なる田上清貞氏が一月十一
日博多丸にて神戸出帆渡歐の途に上られたる事はなり、
氏は先づ同級生なる橋本軍醫を民賢に訪ね、次て Giessea
に落着かるゝものなりと云ふ

而して氏が自筆の履歷書を得たれば今此を掲げんに

富山市千石町 田 上 清 貞

明治九年六月九日生

明治廿八年四月富山尋常中學校卒業、全九月第四高等
學校醫學部入學、卅二年十一月十一日全校卒業
卅三年一月十八日東京醫科大學眼科介補拜命、全年十
二月十三日辭職豊橋病院眼科部長就任

卅五年十月十五日右辭職、十一月一日於富山市眼科專
門開業

○嶋田吉三郎氏通信

(十二月十五日京
都發小川教授宛)

(前畧)小生儀幸に其後益快方に向ひ體量も在澤の時に比
し約一貫目の増加を呈し候、偏に自然の影響多謝の至り
に存じ喜居候、房州は十一月末に出發し其後十日間東京
に滞留遊び居り本月十一日東京發翌日當地に着致し目下
大學解剖學教室に入り研究生として勉強致す事と相成候
教室に、金澤の卒業なる富山縣人岡嶋敬治氏助手として
勤務せられ誠に便宜を得候、氏は篤學精研頗る健筆の學
者にて温順の人に候、小生爾後師友學兄として日夕多大
の裨益を得る事と大に喜居候(下畧)

○石橋四郎氏通信

(在烟臺、獨立守備第三大隊
分遣醫務室十一月廿七日發 小川教授宛)

(前畧)時下當地方も早や嚴寒の候と相成り室外の温度は
左の通に御座候、但し最近十日間丈御覽に入れ候

區分 午前六時 午後二時 午後十時 最高氣溫 最低氣溫
日次 測 定
十七七日 一三、〇 一四、〇 一四、〇 一四、〇 一五、〇

十八日	一三、〇	一一、〇	一〇、〇	一〇、五	一五、〇
十九日	一二、五	三、五	一四、〇	四、〇	一二、〇
二十日	一七、〇	〇、〇	一八、〇	〇、〇	一一、五
廿一日	一〇、〇	二、〇	一四、〇	二、〇	一〇、五
廿二日	一四、〇	一、〇	一五、〇	一、〇	一一、〇
廿三日	一五、〇	一三、〇	一九、五	一、五	一九、五
廿四日	一四、〇	一五、〇	一一、〇	一四、五	一五、〇
廿五日	一三、〇	一三、〇	一一、五	一二、〇	一四、〇
廿六日	一一、〇	一一、〇	一九、〇	一〇、五	一二、〇

(備考「一一、〇」は攝氏零下十一度を示す)

頃日最早鶏卵凍り肉類凍る状態に候も一般兵舎及宿舍は露國の建設せるものを過半は使用し只修繕致したるのみ且又新築も右建物に等しきものなるを以て保温上大に宜しく候、従來のものは壁の厚さ七十仙迷有之(新設のものには四十仙迷)扉及窓戸は皆二重にて其内外の戸の距離二十五仙迷以上も御座候、加之露國式暖爐の設備有之候事とて室内に居候へば寒サ知ラズと申す位に候、露國式暖爐とは内壁は凡て煉瓦にて外に薄き鐵板を巻きしもの直徑平均三尺(大中小の別あり)長サ天井まで一尺を餘ますのみにて普通二、八米突、暖房面は二、一米突に御座候、凡て圓形にて床面上約一米突迄は燃火部にて其以上は地平に境界せられ居り其上部は縦に六個に區分せられ各上

或は下にて連絡致居候故煙は先づ地平の境界の一小孔を通して煙突内の六個の一個を通りて昇り更に隣の導烟管を傳ふて降り次に又第三を昇り斯くして最終に第六を降り來りし煙は始めて其側面にある眞の煙突に導かるゝにて其の煙の通路は非常に長き理にて一度暖り候ものは容易に冷却仕らす候、此内側の煙瓦も豎に築きしもの及横に築きしものにて自ら暖りの遅速御座候、而して斯る大なるものにてありながら燃料の少量にて足るには驚くの外なく候、即ち朝夕一回宛一貫五百目の石炭を投じ候はゞ事足り申候、爲に之か方法理由を知らざる内は内地の暖爐の如く非常に多量の石炭を燃やし暑サの爲に室内に居ること出來ざる位に相成候事も御座候、右の如く朝夕一回宛にても室内の氣温は十七八度位に保たれ居り全く春の如き心地にて「アンカ」「コダツ」等は不要に御座候、サスガ極寒の「ロス」は防寒には中々發達致居候、御承知の通り支那人の炕は日本の「コダツ」よりは宜しく候も猶一般の設備上よりして露國式暖爐に劣る事數等に候、内地の北海道或は北陸にても建築物新設の際には露國式暖爐を据附候はゞ大なる利益と被存候、建築費は初め一回七十圓斗りかゝり候も以後に於ける利益等はまた大なるものと存じ殊に病院の病室などには大に適當と存候、但し薪ならは一日五本にて事足るとの事に候

(通信)

兎に角右の如く防寒設備としては殆んど至れり盡せる有様にて小生等には誠に滿洲の樂天地に御座候云々

○笠嶋吉郎氏通信

(一月元旦發) 小川教授宛

(前畧)東京にては花柳病學會講習會にて其一汎を修め次て昨春傳染病研究所へ入り四月歸國直に福岡醫科大學外科傍觀月餘にして歸村實地に着手致候、幸に御蔭を以て一般患者は兎も角産婦人科患者は郡内六十餘名の開業醫中第一位を占め夏期は一日投藥數百二十餘名に達し現今にても常に七十名を下りたる事なく入院患者六名を下りし事なく目下分院設立に着手致候有様にて思はざる失禮致候段吳々も御容捨被下度候

開業式は去る二十三日二百餘名を招き糸島始まりて初めての園遊會を催ふし候、頃日は四五里の遠方より往診を依頼し來り毎日午後一時出掛け夜十時より早く歸宅致したる事なき程の多忙を極め居り候、殊に御申送り度きは開業式の早朝(午前四時頃)難産の往診を依頼し來り候間開運の善兆なりと腕車を飛ばし候處兼て二兒を疑ひ置き候處のもの今や一兒は死産致し續て又一兒分娩、先づ安心と手を引かんとすれば又一兒、遂に女性の三兒を分娩致候、胎盤も都合よく下りしが(羊膜癒着)一ヶの胎に三

ヶの臍帶あり二兒丈健全なりしも第二日と第三日とに日を追ふて死去致候、母体は健全にて胎盤は保存致居候へば後日詳細御知らせ可申母体分娩前の事も少々取調置き候(后畧)

○有壁一雄氏通信

(一月元旦 京都發) 小川教授宛

(前畧)奉職以來四閱年申上くる程の「アルバイ」も無之依然たる吳下の舊阿蒙未だ高恩の萬分の一を報せざるを慚愧致居候、當大學には金澤出身者小生一人にて他は皆赴任致候、誠に心細き次第に候、小生も四五の申込有之候も長し短しにて皆斷り昨年夏函館病院婦人科部長と決し候も該病院其後燒失の爲め相談も取消し申候、然し一二ヶ月中には良き處へ赴任致すなり開業致すなり何れか決定可致候

當大學には金澤出身者既往十數人の遊學有之候が、其内、久保、石森、岡島、其二三の先輩諸氏は出藍の譽高く、後進者の肩身を廣ふする所に御座候、諸方より大學に研究として來るものゝ評判の良惡、成業の如何等は畢竟するに「根氣の強弱、研鑽心の厚、薄、及び外國語學力の巧拙」に因由するものと思はれ候、……此三者さへ備はり居候は、大學出身者怖るゝに足らず中には醫學専門

學校の優秀なるものに劣る新學士は毎年過半有之候、然し肩書の有無にて世間より拙劣視せらる、は遺憾に候、今后万一當大學に遊學するもの有之候は、以上申述候三者の備はりたる人を推舉被成下度は是れ母校の名譽をして一層の發揚に到らしむる要件に候 (后畧)

○谷澤一郎氏通信 (四十年十二月八日氏宛) (廿二日鐵嶺發)

(前畧)十全會雜誌到達仕り御蔭にて先輩諸先生と親しく談話の感有之會誌の爲め御骨折の段幾重にも奉感謝候、當地は頃日零下十度乃至二十五度を上下致し隨分寒威酷烈を極め申候、第十師團の渡滿後は全窓生多く軍隊の駐屯地は北は四平街より南は旅順まで各地一名乃至二名ありて當地には松坂一等藥劑官あり甚た心強く思致候、此頃は當地諸建築物工業等盛に起り電話電信線の多き御地香林坊にも優り當病院も二十二万圓を以て新築中にて來年八月竣工の豫定に御座候、當病院長半田二等軍醫正は洋行歸にて甚た博學の人なれば吾々部下は頗る幸福に存候、然し其代り日々の獨乙語翻譯せねばならぬ問題續々與へらるには甚た閉口仕る事も有之不可解に終ることも度々御座候、小生は外科擔任致居候も何分學校卒業後二ヶ年間の隊附勤務に腦中空虛の折柄なれば目下苦心罷在

候、何とかしてモ一少した醫者様らしくならんものと心掛居候

尙屯在の全窓生は北方より數へ來れば (八田生日、讀者、山下氏通信を参照せよ)

四平街 三等軍醫 速水昇

昌圖 全 阿部時雄

鐵嶺 一等藥劑官 松坂治助

奉天 全 谷澤一郎

遼陽 全 山下銀吾

柳樹屯 三等藥劑官 長崎謙治

旅順 三等軍醫 鈴木實

全 羽田公太郎

にして旅行等には頗る便利と存候、機會もあらば集合地を撰んで全窓會をも開かんものと話し居申候

○山下銀吾氏通信 (一月元旦 奉天發) 八田氏宛

(前畧)野生事昨年十月六日鳥取兵舎を出發致し全十八日奉天へ到着仕候、今回は第十四師團と交代して我第十師團滿洲守備の任に當り輜重隊を殘すの他は皆十月中に渡航致候

一昨年夏休には親しく滿洲旅行被遊候折各地の狀況既に

(通信)

御存知の御事ならんも冬の滿洲はまた内地より別格異様に感ずる點不尠候、小生は當地到着後唯一回遼陽へ參り候のみにて凡て土地の景況は貴下よりも却て暗き事と存候、然し日を追ふて諸處へ參り度或は本年夏休を利用して古戰場を吊ひ度存候 (中略)

野生等の駐屯交代期は二ヶ年の豫定にて其任務は鐵道守備と云ふ事に候、同校出身の士は當師團に随分多き爲め目下當地在勤者尠からず、南方より數ふれば旅順歩卅九には羽田公太郎氏、柳樹屯歩二〇には鈴木實氏、遼陽歩四〇ノ一には佐々木純一郎氏、當奉天歩四〇ノ三には駒井定哉氏と野生、烟臺獨立守備第三には石橋四郎氏、鐵嶺衛戍病院には谷澤一郎氏、其他阿部時雄氏、並河權六氏など十人餘に達し申候

奉天は目下歩四〇ノ三と獨立守備ノ三の内一個中隊と駐屯致候、兵營は共に相接近し奉天停車場より四、五百米突東方に位し奉天市街は實に東方四千米突位に存し其間立派なる通路有之目下鐵道馬車布設中にて不遠開通、一方ならず便利を得る事と存候、奉天に在留する日本人は男女合せて約三千と申し日本總領事館、郵便局、警務署、小學校、公立病院等有之、活潑なる日本少年可愛らしき日本少女が日々零度以下の外氣をも厭はず樂しげに通學するを見る時は何んとも名狀すべからざる愉快の感有之

候、先月廿八日に内地より新兵到着、本年より滿洲にて新兵教育を始むるものにて繁忙を極め居候云々

* * * * *

會 告

○寄贈及交換書目

(一月廿四日迄 領収ノ分)

- 東京醫事新誌 一五五、六七八、九四〇、
一二三四五六
- 醫事新聞 七四五六七八九
- 大日本私立衛生會雜誌 二九三四五
- 東京醫學會雜誌 二ノ三〇二、三四三ノ一、全
- 好生館醫事研究會雜誌 一四ノ五六二五ノ一、全
- 治療藥報 二八九三〇
- 醫海時報 六九八九七〇〇、一二三四五六七八九
- 日本醫事週報 六九、六〇、二、三、四
五六七八九七〇
- 北越醫學會々報 一六二二
- 臨床藥石新報 二九三〇一
- 順天堂醫事研究會雜誌 四八、九二〇
- 藝備醫事 一三七

光


第十全會雜誌第四十九號

(通信)

○自明治四十年十一月三日校外十全會費納付調書
至全四十四年一月廿二日

金額	氏名
金參圓 (自四十四年度三ヶ年分)	須貝猪次君
金參圓 全	塚崎茂君
金參圓 全	伊坂春君
金參圓 全	橋爪元吉君
金參圓 全	水口順君
金參圓 全	松本常次君
金參圓 全	池田茂君
金參圓 全	山川三君
金參圓 全	池谷運平君
金參圓 全	柿澤雅一君
金參圓 全	春日望君
金參圓 全	志田主稅君
金參圓 全	伴鐸也君
金參圓 全	千葉茂君
金參圓 全	水口史郎君
金參圓 全	若林古福君
金參圓 全	宇野正君
金參圓 全	白井濟君
金參圓 全	三田村直君

金參圓 (自四十四年度三ヶ年分)	橋本正次君
金參圓 全	加藤慧治郎君
金參圓 全	瀧澤武藏君
金參圓 全	遠山正輝君
金參圓 全	鷹見義郎君
金參圓 全	桑原益方君
金參圓 全	谷道清君
金參圓 全	山中房次郎君
金參圓 全	深澤治三郎君
金貳圓 (自三十七年度二ヶ年分)	竹松衛君
金參圓 (自三十八年度三ヶ年分)	池川周治郎君
金參圓 全	山田外來雄君
金參圓 (自四十四年度五ヶ年分)	中野玄次君
金參圓 (自四十四年度五ヶ年分)	本田三郎君
金參圓 (自四十五年五ヶ年分)	高橋常作君
金參圓 (自三十七年度三ヶ年分)	鎌田勘之助君
金四圓 (自三十八年度四ヶ年分)	永井學造君
金參圓 (自四十一年度五ヶ年分)	吉江桑次郎君
金貳圓 (自三十七年度二ヶ年分)	德本千秋君
金壹圓 (自三十九年度一ヶ年分)	堀田圭三君
金參圓 (自三十九年度三ヶ年分)	猪木彦助君
金壹圓 (自三十九年度一ヶ年分)	太田精一君



醫學博士
高安右人君

わが尊敬する金澤醫學專門學校長兼金澤病院院長醫學博士高安右人君は舊姓武岡氏、萬延元年庚申七月十九日肥前小城郡板屋村に生る、明治九年十二月東京外國語學校に入り獨逸語、數學、漢學を修め、全十一年五月舊東京大學醫學部に入學醫學研究に身を委ねるこゝに十星霜、二十年一月帝國大學に於て業を卒へ七月卒業證書并に醫學士の稱號を授與せらる、七月大學院入學許可を得、醫科大學第一醫院眼科助手となり、九月大學院を退き、更に醫科大學助手を命ぜられたり、越へて翌二十一年三月三十一日第四高等中學校教諭に任ぜられ、叙委任官四等、第四高等中學校醫學部勤務、中級俸を下賜せらる、即ち此年は君が任に此地に來り綿々として二十春秋を經、幾多著大の功績を擧げたる第一年に於て、君と共に吾等の組して忘れざるべきの歳也、四月には金澤病院眼科長を囑託せられ醫術開業試驗委員たり、廿三年十月、任第四高等中學校教授、叙委任官四等、中級俸下賜、翌年正七位に叙せられ、六級俸を下賜せらる、二十六年四月高等官六等となり、第四高等中學校醫學部主事、九月石川縣金澤病院院長を囑託せらる、廿八年陞叙高等官五等、翌年從六位に叙し三級俸を賜はる、三十年五月高等官四等、四級俸下賜、六月正六位に叙せられ、三十二年四月十七日拜謁仰付けらる、全年五月廿六日文部省より、眼科醫學研究の爲め滿二ヶ年間獨國留學の命を受け、九月十三日、愈留學の爲め任地出發、十四日神戸出航、鵬程無恙全年十月廿四日獨國柏林府に着し、柏林市立病院病理教室に於て大學教授フォン、ハンゼマン氏の下に病理解剖學を研修し、更に王立シャリテール病院眼科部に入り斯界の泰斗フォン、グレンフェ教授に親炙して數箇の業績を擧ぐ、偶々西曆千九百年八月佛國巴里府に於て第十三回萬國醫學會の開催あるを機とし全學會に臨み、兼て佛、伊、瑞西、獨の諸邦を歴遊し、善く諸大家の門を叩きて蘊積を廣めらる、後ライプツヒ大學に轉じザットレル教授に師事して眼科學を研鑽、蘊蓄益々深し、茲に留學の期滿ち全三十四年六月十二日歸朝、間も亦勳六等に叙し瑞寶章を授けられ、十月八日金澤醫學專門學校長兼金澤醫學專門學校教授に任ぜられ、高等官三等四級俸を賜はる、十二月從五位に叙せられ、三十六年石川縣金澤病院院長兼眼科醫長たり、曩に論文を提出したるにより全年七月廿九日醫學博士の學位を授與せらる、三十八年一月陞叙高等官二等、正五位に叙し、勳五等瑞寶章を賜ふ、時正に日露戰役に際し衛生勤務に従事せられ、翌年四月賞勳局より三十七八年戰役事件の功に因り勳四等瑞寶章を授け賜ふ、君現に高等官二等正五位勳四等たり、以上は君が官歴の略叙に留まる

若夫れ君が二十の長年月、一意專念、不屈不撓の精勵を以て或は醫官に、濟生に、或は校、院の經營に任じて多大の功績を擧げ、また多端ふる公務の間常に科學の研鑽に努めて斯界に貢獻せられたる幾多の業績に至りては短文之を盡す能はざるあり、宜かり陽春四月、門弟子等相背りて君が在職二十年祝賀會を擧げ君の徳を頌せる事や博士尙ほ芳壽萬歲、官秩功績、後人の録する所必す今日に倍せん、天長地久、君北陸の山河に別るゝふかれ

明治四十一年六月

謹 識

